

大妻女子大学 地域連携推進センター  
令和 5 年度年報

第 11 号



令和 6 年 6 月

大妻女子大学 地域連携推進センター

---

---

## 目 次

---

---

地域連携推進センターの概要	1
地域連携推進センター設置の背景	1
運営基本方針	1
機能と役割	1
組織構成	2
委員会構成	2
構成員	3
令和5年度 地域連携プロジェクト報告	4
地域連携プロジェクト概要	4
地域連携プロジェクト採択一覧	4
和装振興プロジェクト ～伝えよう！和服の魅力～	6
北海道美瑛町の公立学校の児童・生徒への教育支援	8
CHIYODA Creative ART Lab for Children 千代田クリエイティブ・アートラボ	10
少子化地域の行政との協働による保育の魅力・情報を保護者に伝えるプロジェクト	12
アダプトフラワーロードの会との地域美化活動	
ー活動時の安全管理の整備を中心にー	14
里地・里山活性化プロジェクト～都市と地方を環境教育で結ぶ～	16
子どもと緑が育つ番町・九段のまちづくり提案	18
能登の里海を守る：海育実践と地域活性化プロジェクト	20
多摩ニュータウン南大沢40年CIプロジェクトと	
高齢者と子どもたちのエンパワーメント支援	22
里親家庭の子どものピアサポート活動	24
環境と食の調和に着目した健康づくりの推進	
～産官学民連携・中高大連携による取り組み～	26
市民と育てる「多摩市立中央図書館」サポートプロジェクト	
ー開館前準備から開館後の市民参加イベントの開催ー	28
令和5年度 地域貢献プロジェクト報告	30
地域貢献プロジェクト概要	30
地域貢献プロジェクト採択一覧	30
親子で楽しくパン作り教室	31
健康への食意識向上とがんの食を支える	
「食べて・動いて・整える～自分に恋して～」の取り組み	33
小学校の読書活動推進への貢献を図る学生ブックソムリエの展開	35
大妻さくら祭り 2024	37
業務報告	39
事業内容	39

令和 5 年度 決算報告 .....	42
資料 .....	43
大妻女子大学地域連携推進センター規程 .....	43
大妻女子大学地域連携推進センター運営委員会規程 .....	45
大妻女子大学地域連携推進センター企画実行委員会規程 .....	47

# 地域連携推進センターの概要

## 地域連携推進センター設置の背景

平成 17 年 1 月の中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像（答申）」において、21 世紀における大学の使命は、教育と研究だけでなく、社会貢献が第三の使命とされました。大学の自己点検・評価にも含まれているように、大学が果たすべき役割の中で、学術研究や人材育成に加えて「地域連携」が重要性を増してきています。

本学でも、「大妻学院のミッションと経営指針（平成 20 年 9 月）」において「教育機関としての社会的責任を認識し地域社会との連携に努める」ことが掲げられ、学院の社会的責任として「今後地域貢献を展開させていく組織として教職員協働による地域連帯センター（仮称）による組織的支援が欠かせない」と述べられています。

平成 21 年度に開催された「地域社会との連帯に関する懇話会」では、様々な角度から本学の地域連携の在り方を検討した結果、今後一層、在学生、教員、卒業生と地域社会との連携を活性化して広報につなげると共に、それらを促進する機能として「大学の社会的責任（USR）全般に関わる情報の整理と一元化、連絡・調整、広報の一部を担うもの」として地域連携に関わる包括的センターが必要であるとまとめています。

また、これら社会貢献や社会的責任という視点に加え、学生が地域の諸活動に参加することは、主体性や積極性を養い、実体験を通して考える機会となり、教育的観点からも地域連携の推進が重要であることは言うまでもありません。

これらを背景として、平成 25 年 4 月 1 日に地域連携推進センターが新たに設置されました。

## 運営基本方針

1. 大学の社会的責任として、地域連携を積極的に推進することを基本方針とする。
2. 地域連携でいうところの「地域」は、近隣地域に限らず、地理的範囲を超えた保護者、卒業生、関係機関、企業、行政など、大妻女子大学を取り巻くステークホルダー全体を含むものとする。
3. 地域連携の内容は、大妻女子大学の教育理念である「女性の自立のための女子一貫教育」の考えを踏まえ、学生が様々な地域と関わる中で主体性や自立心を身に付けることができるよう、その活動に在学生が直接関わったり、その成果を在学生の教育に反映できるものについて、重点的に取り組む。

## 機能と役割

1. 広報機能

地域連携のテーマの下、学内における既存の活動や事業を WEB サイト等でタイムリーに発信するとともに、年次報告の形で、本学の地域連携の実績を外部に公表する。

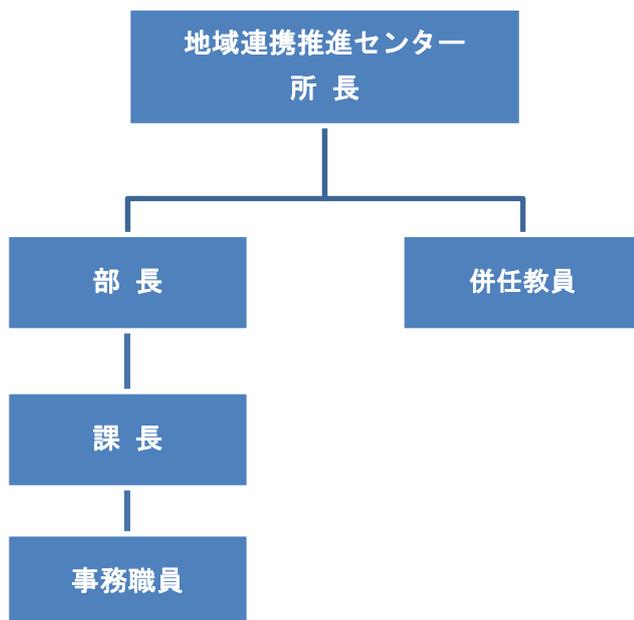
2. マッチング機能

社会のニーズ（市民、企業、行政等）と大学の持つ機能のマッチングを支援し、学外からの「地域連携」に関連した相談や紹介要請に応え、学内の資源につなげる。

### 3. 企画・活動促進機能

社会貢献や社会的責任の実行のみでなく、教育機能を併せ持つ地域連携活動を企画し、活動を促進するため、「地域連携プロジェクト事業」(4 ページ参照)を、また、より地域に根ざした活動を促進するため「地域貢献プロジェクト事業」(30 ページ参照)を地域連携推進センターの下に創設し、その運営を行う。

#### 組織構成



#### 委員会構成



## 構成員

令和5年度 地域連携推進センター名簿

構成員	氏名	所属等
センター所長	小川 浩(~R5.5.31) 屋敷 和子(R5.6.1~)	副学長 常任理事
センター事務部部长	小川 雅之	事務局
センター事務部課長	栗田 陽介	事務局
センター事務職員	中本 猛	事務局
	大妻 泰三	事務局
	宮澤 律江	事務局
併任教員	石井 雅幸	家政学部
	天野 みどり	文学部
	炭谷 晃男	社会情報学部
	飛田 和樹	人間関係学部
	高田 馨里	比較文化学部
	堀口 美恵子	短期大学部

令和5年度 地域連携推進センター運営委員会名簿

構成員	氏名	所属等
センター所長	小川 浩(~R5.5.31) 屋敷 和子(R5.6.1~)	副学長 常任理事
センター事務部部长	小川 雅之	事務局
センター事務部課長	栗田 陽介	事務局
家政学部長	市川 博	家政学部
文学部長	増野 弘幸	文学部
社会情報学部長	藤村 考	社会情報学部
人間関係学部長	齊藤 豊	人間関係学部
比較文化学部長	貫井 一美	比較文化学部
短期大学部長	下坂 智恵	短期大学部
人間文化研究科長	田中 直子	人間文化研究科
事務局長	杉田 学	事務局
その他学長の委嘱する者	無 し	

令和5年度 地域連携推進センター企画実行委員会名簿

構成員	氏名	所属等
センター所長	小川 浩(~R5.5.31) 屋敷 和子(R5.6.1~)	副学長 常任理事
センター事務部部长	小川 雅之	事務局
センター事務部課長	栗田 陽介	事務局
センター事務職員から1名	中本 猛	事務局
併任教員	石井 雅幸	家政学部
	天野 みどり	文学部
	炭谷 晃男	社会情報学部
	飛田 和樹	人間関係学部
	高田 馨里	比較文化学部
	堀口 美恵子	短期大学部
各学部・研究科から選ばれた専任教員	石井 雅幸	家政学部
	天野 みどり	文学部
	炭谷 晃男	社会情報学部
	田中 優	人間関係学部
	高田 馨里	比較文化学部
	堀口 美恵子	短期大学部
学長の委嘱する専任教員	無 し	
その他事務局長の委嘱する者	無 し	

# 令和5年度 地域連携プロジェクト報告

## 地域連携プロジェクト概要

### 1. 趣旨

教職員のグループ又は教職員と学生のグループによる、学生の主体性や自立心が身に付く地域連携活動の一層の推進・発展を図ることを目的に、その活動経費を補助する。

### 2. 対象テーマ

地域社会との連携を活性化するとともに、学生の教育に反映できる活動。分野は不問。

### 3. 応募資格

個人ではなく、以下のいずれかに該当するグループであることが必要。

- ・ 本学の教職員で構成されるグループ
- ・ 本学の教職員と学生(大学院生・短大生を含む)で構成されるグループ

※学生のみグループは応募不可。

※申請代表者は専任教職員に限る。

※申請代表者としての申請は1件に限る。

### 4. プロジェクト支援期間

令和5年5月11日(木)～令和6年3月31日(日)

### 5. 支援額及び採択件数

支援額：1件につき30万円を上限

採択数：10件程度（うち、6件程度を千代田枠または多摩枠とする）

## 地域連携プロジェクト採択一覧

プロジェクト名	代表者
和装振興プロジェクト ～伝えよう！和服の魅力～	阿部 栄子
北海道美瑛町の公立学校の児童・生徒への教育支援	石井 雅幸
CHIYODA Creative ART Lab for Children 千代田クリエイティブ・アートラボ	金田 卓也
少子化地域の行政との協働による保育の魅力・情報を保護者に伝えるプロジェクト	石井 章仁
アダプトフラワーロードの会との地域美化活動ー活動時の安全管理の整備を中心にー	厚東 芳樹
里地・里山活性化プロジェクト～都市と地方を環境教育で結ぶ～	甲野 毅
子どもと緑が育つ番町・九段のまちづくり提案	木下 勇
能登の里海を守る：海育実践と地域活性化プロジェクト	細谷 夏実
多摩ニュータウン南大沢40年CIプロジェクトと高齢者と子どもたちのエンパワ ーメント支援	炭谷 晃男
里親家庭の子どものピアサポート活動	山本 真知子
環境と食の調和に着目した健康づくりの推進 ～産官学民連携・中高大連携によ る取り組み～	堀口 美恵子

市民と育てる「多摩市立中央図書館」サポートプロジェクトー開館前準備から開館後の市民参加イベントの開催ー
-----------------------------------------------------

深水 浩司
-------

## 和装振興プロジェクト ～伝えよう！和服の魅力～

阿部 栄子 教授  
(家政学部 被服学科)

### 【プロジェクトの目的】

日本の和服には、我が国ならではの「文化」が凝縮されています。また、和服（きもの）が完成するまでの各過程の全てに、日本人の卓越した繊細な職人の心と技が生かされており、世界のどの国の民族衣装にも劣ることのない誇るべき伝統的染織技術によって作り出されています。本和装振興プロジェクトの開催を通して、世代を超えた人々が広く和服（きもの）に興味をもち、日本文化の理解を深め、着実に後世へと「きもの文化」を伝承していくことを目的として実施してきました。

### 【プロジェクトの概要と実施効果】

これまでに、本学家政学部被服学科における卒業研究（和服製作）はいくつもの団体・地域から注目され、数年前から日本橋（東京）における“きものサロネ in 日本橋”において、学生きもの優秀作品として複数点が毎回選定され、毎年、公開展示をして参りました（例えば、日本橋（東京・COREDO 室町 2・三井ホール）。今年度も、和服を学ぶ全国の学生作品の中から、本学の学生作品が「学生優秀作品」として選定されました。これらの作品展示実施に向けた実施計画と作品の公開展示の方法、さらにこれらのきもの着装コーディネートを本プロジェクトの学生が担当するものです。展示期間中の展示解説も本プロジェクトメンバーが担当しました（一般展示公開：令和 5 年 11 月 4・5 日、会場：東京国際フォーラム E1 ホール[東京都千代田区丸の内 3-5-1]）。

令和 5 年度は、和装きもの 2 点（婚礼衣装：比翼仕立ての引振り袖、比翼仕立ての黒留袖）が選定され、今回で連続 5 回目を迎えました。これまでと同様、これらの作品展示の実施に向けた計画と作品展示、着装コーディネートの担当ですが、学生にとっては初めての経験ばかりで、勉強の積み重ねと戸惑い続きの日々ではありましたがとても有意義な活動となりました。このようなプロジェクトの開催を重ねるごとに、作品の展示方法の向上だけでなく、確実に学生の学びへの士気が深まっていることを実感しました。

本開催は、プロジェクトに参加した学生全員がこれらの実施を通して、日本文化への理解が更に深まったことであり、とても意義深いことです。また、この活動を通してプロジェクトの目的でもある「きもの（和服）」を多くの若い人たちが気軽に楽しめる衣服として、身近に捉えられるようになってきていること、製作・着装を含めた実技の向上、人々の通過儀礼をも解説指導できる本格的なプロジェクトチームとして成長しています。

本学のこのような学びは、大切にしつつ、今後も教育・研究に望みたいと思います。



展示の様子（於 東京国際フォーラム）

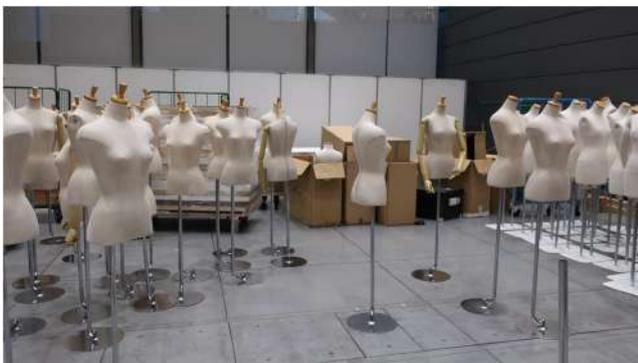


本学学生の作品

（左：引き振り袖 右：黒留め袖）



和服姿で解説をするプロジェクトメンバー



展示準備中の様子



実施ポスター

## 北海道美瑛町の公立学校の児童・生徒への教育支援

石井 雅幸 教授  
(家政学部 児童学科)

概要：2022年度包括連携協定を結んだ北海道美瑛町の公立学校の児童・生徒に対して、本学学生と教員による学校支援の取り組みを昨年度試行的に行いました。その成果を踏まえて、今年度から継続的に毎年9月と2月にそれぞれ6名の学生を8日間美瑛町に派遣し、美瑛町内の公立小中学校への教育的支援や美瑛町全体で取り組んでいるイベントへの協力参加を行いました。

具体的には、本学の長期休業期間中に、本学の児童教育専攻の学生が美瑛町内の公立学校の学校教育活動に入り、学習支援や学校生活指導上の支援を要する児童・生徒への支援を美瑛町教育委員会並びに

本学の児童学科の教員の指導のもとで行っていくものです。9月、2月ともに最終日に行われました美瑛町教育委員会内での学生による成果発表（図1）から以下のような成果が得られました。参加した学生は、美瑛町の規模が、町内の子どもの実態を把握した個に応じた教育支援を行える可能性を知ることができました。また、町全体が町を活性化させるための取り組みに前向きに取り組んでいることを実際に手伝うという体験から知ることができました。学生が、地方の小さな町が存在している意味を知るとともに、地方創生の必要性を強く感じていました。以上の取り組みが、本学の知名度を美瑛町にも高め、将来的には美瑛・富良野・旭川周辺の若者の本学への進学を促すきっかけになったり、都市に住む学生が地方創生の必要性を学んだりするきっかけができることをねらっています。

### 1 取り組み内容

児童教育専攻の学生6名ずつのべ合計12名が、美瑛町に出かけ、下記のような取り組みを行ってきました。9月と2月の2回の取り組みは、季節の違いだけでなく、訪問した学校の形態が異なります。9月は、町内でも比較的規模が大きい学校に入りました（表1）。

表1 9月の取り組みの活動概要

9月4日（月）：美瑛町教育委員会でのオリエンテーション、その後学校への挨拶
9月5日（火）～9月8日（金）：8時から15時は美瑛小学校・美瑛東小学校にて各学校で必要としていることのボランティア活動実施。15時以降は美瑛中学校に行き、文化祭の準備の手伝い。
9月9日（土）：美瑛町の町全体の魅力を知る活動。
9月10日（日）：美瑛町主催のセンチュリーライドのゴール付近での手伝いの実施。
9月11日（月）：美瑛町教育委員会での成果発表会。



図1 最終日に行われた美瑛町教育委員会での学生による成果発表会の様子（2月）

2月は、9月とは異なる小規模校での活動でした。大学近郊の都市部の学校では見られない複式学級の授業に入り支援を行いました（表2）。

表2 2月の取り組みの活動概要

2月13日（火）：美瑛町教育委員会でのオリエンテーション、その後学校へのご挨拶。
2月14日（水）：美馬牛小学校での学校支援活動。 現地での移動手段はスクールバス利用
2月15日（木）：明德小学校での学校支援活動。
2月16日（金）：美馬牛中学校での学校支援活動。
2月17日（土）：冬の美瑛の魅力を知る活動と宮様国際スキーマラソンの準備手伝い
2月18日（日）：宮様国際スキーマラソンのゴール付近での手伝いの実施。
2月19日（月）：美沢小学校での授業参観。
2月20日（火）：美瑛町教育委員会での成果発表会。

本取り組みにおいては、2から3名のこれまでに参加した学生の重複参加の形態をとりました。そのことにより、新規参加の学生は、様々な情報を得ることができるとともに、重複参観の学生は、前回と比較して深い考察ができるからです。その結果として、これまで以上の目的達成ができたと言えます。その結果が、本事業の発展的な取り組みに繋がっています。

## 2 本事業の発展として

今回の取り組みが、新たな事業を生み出しています。その一つが、昨年度に引き続き本学学園祭での美瑛町出展と、その中での本学と美瑛町とのつながりを説明したコーナーを設けたことです。その中で、本事業の美瑛町での取り組みに参加した学生が、学びで得たことを、来場者に説明しました（図2）。また、参加学生が、春のさくらまつりの美瑛町出店の手伝いを行いました。

令和5年度は、美瑛町の子供たちが、東京を訪問し、東京の子供たちとともに、東御苑での自然観察、史跡めぐりを行いました。さらに、副学長の小川 浩先生による美瑛町民への美瑛町の福祉・教育施策の価値をお話いただく機会を美瑛町がつくってくださいました。



図2 学園祭にて美瑛の教育を語る学生（令和4年度の学園祭の様子写真）

これらの取り組みの中で、美瑛町との関係が深まるだけでなく、学生の地方創生の意識や少人数体制の中での徹底した個別支援の教育の在り方への意識が高まっています。最後に、美瑛町の取り組みにかかわった令和4年度の卒業生が美瑛町内の公立小学校教員に赴任し、美瑛町内の少人数指導に関わる仕事を始めています。また、美瑛町内の唯一の高等学校である北海道立美瑛高等学校を指定校の一つに指定することができました。こうした取り組みを行う中で、少しずつ都市部にある女子大学の学生が地方創生の必要性を感じて自らのキャリアにそのことを反映できるような場が複数できるきっかけになればと考えています。

構成員：児童学科教員：石井 雅幸、樺山 敏郎、厚東 芳樹、大谷 洋貴、澤井 陽介

美瑛町：美瑛町教育委員会；梶原 祐治、目良 久美、三浦 誠

美瑛町まちづくり推進課；観音 太郎、美瑛町総務課；新村 猛

本事業に参加した家政学部児童学科児童教育専攻の1年（1名）、2年（2名）、3年（7名）の学生

## CHIYODA Creative ART Lab for Children 千代田クリエイティブ・アートラボ

金田 卓也 教授  
(家政学部 児童学科)

昨年度から地域連携プロジェクトの一環として継続している千代田クリエイティブ・アートラボはスタッフの大学院生と学部生の協力のもとに近隣の幼稚園・保育園・小学校の子どもたちのこんなものを作りたい、こんなものがあったら楽しいといったアイデアを具体的に実現できる場を提供しています。スタッフである大人と関わりながら子どもたちの自由な発想と想像力をさまざまな素材を通して目に見える形にしていきます。参加している子どもたちにとって大学に来ること自体がとても貴重な体験になっています。小学校においては先生と子どもたちは教える・教えられるという関係ですが、ここでは、経験を積んだ大人であっても友だちに近いより対等な関係で接しており、その関係性が活動の中で自由な発想を生み出す素地になっているように思われます。

今年の活動でも自由な発想に基づくいろいろな作品が創り出されましたが、子どもたちの持っている潜在的なクリエイティブな力というものに驚かされます。その中からアートラボの特徴がよく反映された2つの作品を紹介しておきます。

### <パネルシアターを用いたストーリーメイキング>

昨年から継続してストーリーメイキングに取り組んでいます。蛍光絵の具で彩色した不織布で切り絵を作り、出きた絵人形をパネル板に貼ったり、配置を変えたり組み合わせたりして、パネルシアターを用いてストーリーを生み出していきます。今年度は、子どもが生み出したストーリーを子ども自身が一場面ごとに撮影し、パソコンで文字を書き入れていくという絵本作りを行いました。

この小学生の女の子の作った絵本もそうですが、子どもたちはストーリーメイキングがとても好きです。そのプロセスを見ていると、言葉で話すという言語的イメージと絵本の絵に表われたビジュアルなイメージというものが相互に関わりながらストーリーそれ自体がより豊かになっていることがわかります。千代田クリエイティブ・アートラボでは、大人であるスタッフが子どもたちの語るストーリーの展開に注意深く耳を傾け、ときには質問しながら、子どもたちのストーリーが新たな展開を生み出すことができるような環境作りに心掛けています。

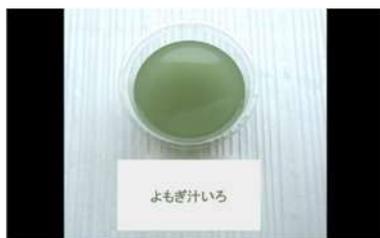


## <色の図鑑 イロペディア>

保育者や小学校教員を目指す児童学専攻の学生が造形指導に関する授業で試験的に作った色水が大学の造形表現室に残っていたところ、クリエイティブ・アートラボにやって来た5歳児、小学1年生、小学6年生の子どもたちがその残された色水に興味を持ち、自分たちでも色水作りを始めました。大学生の活動が子どもたちの活動につながり、幼児と小学生といった異年齢の子どもたちが一緒になって新たな活動に発展させていくということもこのアートラボの特色といえるでしょう。

6年生の男の子は作り出した微妙に異なる色に名前を付けていくことがたいへん面白くなり、<色の図鑑 イロペディア>を作成するということになりました。彼は1日だけではなく、しばらくの間この活動を続け、土曜日にやって来たときなど午前中から午後まで5時間余り、色の図鑑作りに没頭しました。最近の子どもたちの生活を見てみると、保育園・幼稚園・小学校の生活だけではなく、習い事なども多く、好きなことに集中するという時間を確保するのがなかなかむずかしいようです。クリエイティブなことをするためには、十分な時間をかけて自分の世界～マイワールド～に入ることが欠かせないように思います。このクリエイティブ・アートラボではそうした時間を子どもたちに提供できるようにしています。

最終的にはオリジナルの色に名前をつけて色図鑑を作る活動の中で100色が図鑑に収録されました。たとえば、「カメムシの目玉いろ」や「微生物のため息いろ」「後悔の電磁波色」といったとてもユニークな色名も見られました。



## 少子化地域の行政との協働による保育の魅力・情報を 保護者に伝えるプロジェクト

石井 章仁 准教授  
(家政学部 児童学科)

### 1. プロジェクトの目的

千葉県東金市は、コロナ禍の出生数減少もあり 15 歳未満の児童の人口が 5,696 人、総数はここ 10 年間で 1,570 人減と、少子化のみならず、町全体も人口減少が進行している。現在、保育施設は、市立保育所 3 園（令和 6 年度より 2 園）、市立幼保連携型認定こども園 2 園（令和 6 年度より 3 園）、私立保育所 2 園、私立認定こども園 1 園（令和 6 年度より 2 園増）、地域型保育所 6 園がある。公立保育所や認定こども園では、外部講師を活用した園内研修の実施や研修と関連させた自己評価の実施等、保育の質向上を目指している。一方、私立園はそれぞれの取組となっており、園のホームページ等の情報もあまりなく市内の保育施設を市民が俯瞰することは難しい。

令和 4 年度、地域連携プロジェクトにおいて、東金市の公立保育所と公立こども園を学生の視点で紹介し保育の内容を伝える冊子づくりを行った。作成した冊子は、市の HP や広報などで伝えられ、千葉日報紙にも取り上げられるなど、情報提供に一定の効果があった。今回のプロジェクトでは、市内の保育施設の紹介を、保育・教育行政の職員や現場の保育者と協働し、より、「子どもの育ちの姿」に焦点を当てたものを作成し、保育の魅力を保護者に伝えることを目指す。こうした取組み自体が、保育や子育て支援現場の理解を深め、確実に学びにつながると考え、学生が直接、人口減少地域の保育施設取材し、その良さを中心に記事として、保護者の目線に立った情報媒体づくりを行った。

### 2. プロジェクトの内容

#### (1) 計画・打合せ

7 月 3 日（月）・17 日（月）；学生が実施内容の詳細を検討した。7 月 24 日（月）；学生と担当課職員が zoom にて、年間のスケジュールや取材の方向性の検討を行った。

#### (2) 取材

①第 1 次取材（保育所・認定こども園 4 園）；取材先は公立 4 園であった（第 2 保育所、第 3 保育所、豊成こども園、福岡こども園）。9 月 1 日（金）、9 月 12 日（火）；実際に 4 つの公立園を訪れ予備調査・取材を行った。

②第 2 次取材（保育所・認定こども園 4 園）；1 次取材をもとに、内容や構成を検討し、次回訪問の内容を検討した。12 月 14 日（木）、前回訪問した公立園を再度取材した。

③第 3 次取材（保育所・認定こども園 5 園）；12 月 27 日（水）、上記 4 園に加え、廃園となる園（第 1 保育所）及び新規開設園（東金国際こども園）の園長取材した。

#### (3) 編集

1 月～2 月、編集作業（業者打ち合わせ含む）を行った。ページ割、レイアウト、文章について、学生が案を作成し、それを基にデザインの案や構成を業者からもらい再度検討した。

#### (4) 発行・配布

印刷物 400 部を市に贈呈し、4 月以降、各園での配布を行い、市 HP での公表などを予定している。

### 3. プロジェクトの成果物

#### (1) 表紙及び「とうがねっこすごろく」、市の保育施設の概要



表紙および裏表紙は、タイトルと目次をつけ、子どもが遊べるように、学生の発案から東金巡りのすごろくデザインとした。

P.2-3 は、東金の保育施設の紹介とした。

とうがねっこすごろく（表紙と裏表紙）

P.2-3 東金の保育施設の紹介

#### (2) 特集記事；自然との出会い



東金市は、自然に恵まれており、自然との出会いは保育内容の特長といえる。

保育の中でそれがどう実践されているのかを事例を通して紹介した。(P.4-7)

P.4-7 特集；自然との出会い

#### (3) 特集記事；季節による遊び、遊びの充実



季節ごとにどのような変化があるのかを夏と冬の取材から可視化した。

自由な雰囲気の中で、主体的な遊びを重視している様子やそのための環境構成、保育者のかかわりかたを取材し、記事にまとめた。(P.8-11)

P.8-11 特集；季節による遊び（左）、遊びの充実（右）

#### (4) 保育環境、保育者の受け止め 子育て支援及び、東金市の保育についての考察



主体的な遊びを重視するための環境構成、保育者のかかわり方等を取材し、記事にまとめた。

最後に担当教員がこれまでの東金市とのかかわりから、保育の特徴や子どもの育ちについてまとめた。(P.12-15)

P.12-15 保育環境、保育者、子育て支援及び市の保育について

### 4. まとめ

学生は市内の様々な保育施設に取材に赴き、子どもや保育者の姿を観てその実践の特長を記事にすることで、保育を観る目を養い人口減少地域の現状を垣間見ることができた。完成した冊子は、今後保護者等に配布され、地域の子育て支援に資することになる。なお、東金市役所福祉部こども課、東金市立保育所、認定こども園の関係者の皆様には多大なるご支援をいただいた。

# アダプトフラワーロードの会との地域美化活動 ー活動時の安全管理の整備を中心にー

厚東 芳樹 准教授  
(家政学部 児童学科)

## 1 はじめに

本取り組みは、2007年から、三番町町内会、九段小学校、(株)プランナーワールド、大妻学院が協定を結んで取り組んでいる三番町フラワーロードの会の活動です。本取り組みは、番町学園通りの九段小学校から大妻学院交差点までの街路樹の升の中に夏前と冬前に花を植え、管理を行うことを通して、三番町の街をみんなで美しくしていく取り組みとしてはじまりました。その後、児童学科児童教育専攻1・2学生が主に履修する「児童学基礎体験演習」の一つの取り組みとしても位置づき、現在に至っています。

今年度は、本活動を維持・管理していくための仕組み創りの継続と活動時の安全管理に関する整備の推進をしていきたいと考え実施した。とりわけ、環境の維持・管理を合理化したいこと、活動時のスムーズな情報伝達の方法を整備し早急な対応が求められる場面などへの安全管理を担保したいこと、の2点をプロジェクト申請の主たる目的としていた。しかしながら、予算配分の関係上、活動時のスムーズな情報伝達の方法を整備し早急な対応が求められる場面などへの安全管理の担保については承認を得ることができなかつたため、今回は主に前者を中心に実施した。

## 2 令和5年度の活動内容

令和5年度は、昨年度同様、すべて対面にて実施可能であったことから、千代田区立九段小学校を含めた地域に方々と合同での春・秋花植活動ができました。合わせて、今年度はこれまで合同での活動が中止となっていた千代田区立九段幼稚園の子供たちとも共同作業を再開することができた。

### 【「フラワーロード活動」の主な組み内容】

- 5月17日18時から、九段小学校にて2023年度第1回計画委員会を実施
- 6月15日アダプトフラワーロード「地域全体の会（春の部）」のための準備を実施
- 6月22日アダプトフラワーロード「地域全体の会（春の部）」を実施
- 週3日のペースで、水やり活動および清掃活動を実施
- 10月10日18時から、九段小学校にて2023年度第2回計画委員会を実施
- 11月9日アダプトフラワーロード「地域全体の会（秋の部）」のための準備を実施
- 11月16日アダプトフラワーロード「地域全体の会（秋の部）」を実施
- 2月13日枯れた花を追加で植える活動の実施
- 週3日のペースで、水やり活動および清掃活動を実施





フラワーロード会での花を植えた活動時の様子

また、地域の皆様と学生たちで協力して植えた花の管理を継続して実施し、街の美化に努めてきた御礼として、年度末には三番町新年会に招待して頂き、改めて地域の皆様全体に報告の場を頂戴することもできた。多くの地域の皆様より、「いつも街を綺麗にしてくれてありがとう」「これからは、も

っと学生達を見かけたら声をかけますね」などといった温かい声も頂くことができた。千代田区長からも、いつも地域の美化活動に努めて頂き本当にありがとうございますという声をかけて頂くなど、改めて地域の皆様と連携した活動であることを実感できる場となった。



### 3 最後に

近年、学校教育現場では子供の言葉の発達の遅れによる学級崩壊が話題となっている。ここには、隣・近所の地域で暮らす人や大人とのコミュニケーションの機会の喪失が大きく関わっていると言われている。多くの地域では、「子供の荒れ」が激しくなりつつあり、1960年代に話題となった教室の危機問題に戻りつつあるのではないかとされている。こうした時代だからこそ、地域の中で人と人とが結びつく活動、自分達の地域を自分達で綺麗にして守る活動の重要性や教育的価値はますます高くなるものと考え、本活動を継続して実践している。次年度は、フラワーロードの会に留まらず、地域の子どもたちに向けた活動を拡大していきたいと考えている。

協力者：石井 雅幸、澤井 陽介、林 明子、大谷 洋貴、岩崎 桃子

児童学科児童教育専攻1年と2年全学生

三番町町内会、千代田区立九段小学校・幼稚園、

(株)プランナーワールド・あい・ぽーと麹町、大妻中学高等学校、

千代田区役所環境まちづくり部道路公園課、千代田区社会福祉協議会

## 里地・里山活性化プロジェクト ～都市と地方を環境教育で結ぶ～

甲野 毅 教授

(家政学部 ライフデザイン学科)

### 【目的】

全国で耕作放棄地が増加し、また人の手により管理されるべき森林が放棄され、その結果、里地・里山が荒廃している。また現在の子供たちは自然と触れ合う機会が減少しており、自然との距離が開いている状態にあると言える。そこでこれらの問題を解決するために、私達が実施することは、実際に耕作放棄地や森林に手を入れ、農産物を栽培し管理することで里地・里山を良好にすること、またその現状を都市住民に伝え関心を喚起すること、さらに都市に住む子供達に自然と触れ合う環境教育の機会を提供することである。

### 【活動内容】

里地・里山での活動では、環境教育プログラムに使用できる可能性のあるハーブ類、サツマイモや果樹のブドウをNPO 法人が北杜市を通して借りている耕作放棄地で、学生が栽培した。これらの管理は草刈り、施肥、灌水、収穫、獣害対策など多岐にわたるので、地域住民の協力を得ながら行った。また同時に耕作放棄地を活用した地域活性化プランを考案し、地域住民に提案することを通し、学生の課題解決能力の向上を図った。

都市での活動では、行政と協働して立川市の環境イベントに参加し、また立川市では学生独自の環境教育プログラムを実施した。そこでは耕作放棄地から産出された農産物や森林をテーマにした環境教育プログラムを企画、実施した。また学園祭では、里地・里山の現状また地域を活性化させるためのプランを、来訪者に発表し、都市住民の問題への関心の向上を図った。

日程	内容 ※1は里地・里山での活動 ※2は都市活動での活動
5～6月	耕作放棄地フィールドワーク 地域住民などからのレクチャー※1 苗の植付け（ハーブ・サツマイモ・ブドウ）※1
5～7月	環境教育プログラムの企画※2 耕作放棄地を活用した地域活性化プランの考案※1
7月	学生による地域活性化プラン地域住民への提案（オンライン）※2
6～9月	学生による耕作放棄地の管理（夏の草刈り・灌水・森林管理）※1 （地域住民、教員による耕作放棄地の管理）
10月	学生による耕作放棄地での収穫※1
10月	立川市環境フェア参加 環境教育プログラムの実施※2
10月	大妻女子大学学園祭参加 環境教育プログラムの実施※2
11月	立川市環境教育プログラムの実施※2
12～2月	地域連携プロジェクトブックレット作り・立川市環境会議参加

### 立川市環境イベント（立川市環境フェア）



学生が考えた環境教育プログラムの実施      パネル、クイズ、クラフトを駆使し人工林の現状を伝える

# 大妻女子大学園祭・立川市環境教育プログラム



学祭で農作物を無料配布・パネル展示

ゼミ内で企画内容を考案し、立川市と協議・実施

## 【結果】

立川市環境イベントでは、60名の子供達に里山から排出される間伐材の利用促進を図る体験をしてもらった。自然体験教育プログラムでは、都市公園を4つのゾーンに分け、20名の子供達に4種類の自然体験教育を実施することができた。そして大妻祭では、教室に里地・里山を出現させる演出をし、100名の来訪者に里地・里山を体感するプログラムを実施した。

これらの活動の効果の第1は、耕作放棄地が継続管理されることで新たな地域環境問題の発生が抑制された。また学生による地域活性化プランの提案が、地域住民に良いアイデアとなる可能性があった。第2に、子供への環境教育を行うことで、子供達の成長に良い効果を与えた。また成人にも里地・里山の現状を伝えることが出来、関心を喚起することができた。第3に、学生自身が主体となって行うことで、企画、実践力や課題解決能力を身につけることができた。

### 環境教育学ゼミナールプロジェクトの目的

子どもたちに自然との触れ合うことができる体験の機会を提供すること

調査、企画、実践の手法を学生自身が行うことで自然への関心をより深めること。

地方自治体と協働して実践し、大妻女子大学のキャンパスがある千代田地域、多摩地域の自然環境に貢献すること。

### 年間スケジュール

- 4 自己紹介  
春休み課題発表  
懇話会
- 5 学祭の出し物決め  
小淵沢へフィールドワーク
- 6 地域連携プロジェクト構想
- 7 耕作放棄地再生プラン発表  
ゼミ合宿の計画  
耕作放棄地での管理
- 8 立川市環境フェア準備  
ゼミ合宿(那須)
- 9 ブドウ収穫ボランティア  
学祭準備  
耕作放棄地での収穫
- 10 立川市環境フェアの実施  
学園祭  
里山公園フィールドワーク調査
- 11 立川市環境フェアの振り返り  
立川市里山公園自然体験教育の実施
- 12 SDGs 探求アワード準備  
焼き芋大会  
学生WS参加
- 1 SDGs アワード発表
- 2 卒業論文準備
- 3 耕作放棄地調査

### ゼミナールの概要

大妻女子大学のキャンパスがある千代田地域、多摩地域に居住する自然体に触れる機会があまりない子どもたちを対象に自然体験教育を実施（立川市環境フェア・学園祭）。学生が地域住民と協働しながら、調査、企画、実践を行う。（小淵沢耕作放棄地再生プラン）自然と触れ合うことができるプログラムを学生たちが計画し、参加者を集め実施。（立川市里山自然体験教育）

### 私たちにための環境活動

自然と触れ合うことで環境への理解を深めてもらおうと共に、心の豊かさを養うきっかけをつくる。私達自身が調査、企画、実践を行うことでさらなる学びや発見につなげる。

### 地域連携プロジェクト

#### 里地・里山プロジェクト～都市と地方を環境教育で結ぶ～

山梨県北杜市小淵沢町、キャンパスが存在する千代田地域、多摩地域を対象地域として設定し、里地・里山における耕作地や森林放棄問題と都市に居住する子どもたちの自然体験不足問題などの解決を図るプロジェクト。

都市での活動：都市に居住する自然体験の希薄な子供たちを対象に学生が生産した農作物や森林をテーマにした環境プログラムを実施。

里地里山の活動：小淵沢町の耕作放棄地で学生が地域住民とNPO法人の支援を受けながら農作物を栽培。

学園祭：来訪者に耕作放棄地の現状やそれらを活用した地域活性化プランを伝えることでSDGsの目標15「陸の豊かさを守ろう」の達成を目指しています。

地域連携プロジェクトの内容とSDGs コンテストに参加した際のスライドから成るブックレット

## 子どもと緑が育つ番町・九段のまちづくり提案

木下 勇 教授

(社会情報学部 社会情報学科 環境情報学専攻)

千代田キャンパスの足元の番町・九段地区はマンション建設ラッシュにより、子育て世帯が増えてきているが、公園も少なく、子どもが育つ環境としては決して好ましい環境ではない。2022年の大妻みちあそびに来ていた母親たちから、そんな相談を受けて、3年生のゼミ学生の後期の実習にて、子育ての観点からの番町九段のまちづくり提案の作成にとりくんだ。それは唯一の都市公園であり、震災復興52小公園の一つでもある東郷公園を中心として、地域に多くみられる公開空地、あまり交通量が多くない区画道路をつなげて、子どもが遊び、キッチンカーの飲食などで勤労者、学生、住民も楽しむパークマネジメントを推進する提案であった。一方、母親たちは東郷公園でみんなの畑づくりを推進し、その実現にも協力してきた。このような地域とのつながりが2023年度の地域連携プロジェクトに申請した背景である。

そこで地域連携プロジェクトは3年生のゼミ活動の一環で「子どもと緑が育つ番町・九段のまちづくり提案」というまちづくり構想を地域連携で描くこととした。学生が地域を歩き、観察、インタビュー調査および文献収集等で情報を集め、地域の歴史、地域資源および人的資源を生かした、緑のネットワーク、子どもが遊び育つ環境づくりの提案にまとめる。また、提案のみではなく、それに向けたプレイスメイキングの社会実験を行う。とりわけ公開空地の魅力アップ、車交通量が多くない生活道路を一時的に子どもから高齢者までが楽しむ人間のための街路空間のあり方を社会実験のイベントとして、地元の関係団体と連携して行う。その過程で当該地域を子どもと緑が育つ住み続けられるまちづくりの構想づくりに多くの人の関心を引き込むことを目的とした。

まず、2023年度の大妻みちあそびの機会を借りて、3年生の実習で提案してきた子育ての観点からの地域でのまちづくり提案の展示を行った。展示を見ていた住民から、展示の提案におおいに賛同の声、そしてこのみちあそびをもっと開催してほしい、という声に押されて、12月初旬の土曜日に開催することとした。それは提案にあるように道路・敷地内公開空地をつなげる試みで、季節柄、クリスマスマルシェという名称で、子ども、多世代の人の交流の場としての試行である。

経緯を示すと以下のとおりである。

### 2023年

- 6月 学生の地域調査（観察・インタビューなど）からまちづくり提案。東郷公園みんなの畑の相談に応じる。
- 7月 企画会議 学生によるまちづくり提案中間段階の構想発表  
7月22日の大妻みちあそびにて プチ展示および情報収集  
その場の地域の方々と12月2日にクリスマスマルシェ開催が発想
- 8月 クリスマスマルシェに向けて道路占用許可、使用許可申請で区役所と相談
- 9月 九段二丁目町会 縁日参加（学生有志 2名参加）矢野さんにインタビュー
- 10月 東郷公園からの緑のネットワークまちづくり提案の構想づくり、

Edible Wayプレイスメイキング企画作業、

東郷公園からの緑のネットワークまちづくり提案のブラッシュアップ

12月2日開催予定とした「番九クリスマスマルシェ」に向けて地域と実行委員会発足  
学生の環境情報と情報デザインの協働実習開始

12月 2日 番九クリスマスマルシェ開催、3日九段二丁目町会 餅つき行事に参加  
2024年

1月 東郷公園からの緑のネットワークまちづくり提案 最終まとめ

3月 道と公開空地のネットワークまちづくり提案を千代田区みち・まちあそびシンポジウムで  
発表

なお、この地域連携プロジェクトは、社会情報学部情報デザイン専攻の磯山直也専任講師、家政学部児童学科の久保健太専任講師と協働した分野横断的な試行でもあり、またそれぞれの専門の特色も発揮された学生の働きもあった。さらに、地域のさまざまな団体の協力で行われた。

関連 HP : <https://www.sis.otsuma.ac.jp/aid-lab/ChristmasMarche/2023/>

なお、クリスマスマルシェの様子は東京ケーブルネットワーク取材放映の動画が公開された。

<https://www.youtube.com/watch?v=r3QNCbv3GW8>

marché de Noël  
**番九 クリスマスマルシェ**  
「子どものひろば」は16時まで  
2023 12月2日(土) 10時-17時

会場: 大妻女子大H棟とE棟の間



Rock to Run

出店予定

- 子どものひろば: 木工遊び スプーン&オーナメント (木育ワークショップ, Tree to Green+久保ゼミ), 移動遊び基地プレーカー (午後2時より 協力 NPOコトモ・ワカモノまちing)
- 書道パフォーマンス (大妻女子大学書道部) 子どもと進捗きき書道から
- デューロス (ハルシーキッチン)
- 日商 (川口美穂子ゼミ)
- 書籍茶販売 (学友会執行部)
- クリスマスリースや小物など (橋本屋)
- シトローレン、ドイツから直輸入のクリスマス飾り (実行委員会の店)
- ポッドワイン、コーヒー、ジュース、お弁当、和洋菓子、織花村の名産品 (和屋(Cana ux))
- 手作りクッキー、飲み物キッシュ、販売 (シヨア、サポート、アラガ、ちまた)
- オーナメントづくり、エコバックづくり等 (食育ボランティアグループ「びーち」+R1000)
- まちづくり×情報発信の仕掛け、その他甘酒コア等面白い企画4ブース (木下+磯山ゼミ)
- アタロキッチン (トニーローマ、巨牛荘) ホットサンド、ピザ、ソフトクリーム)
- ピカピカ光にタッチ反射神経遊び (REACTION Lab)
- 能登の海と野菜と糖類の販売 (エンナカ)
- のり巻 (D1 キッズ)
- バレーアート展示 (バレーンアート愛好会「ばるん。」) 使わなくなったシューズやユニフォームの販売 (FC CHIVODA)

手づくりのマルシェで楽しい場をつくるのが目的です。  
万一、営業利益が出た場合は福祉団体に寄付させていただきます。

このイベントは大妻女子大学令和5年度地域連携プロジェクト  
「子どもと親が育つ番町・九段のまちづくり提案」の一環で行っています

後援 千代田区  
協力 九段二丁目町会、  
九段商店街振興組合

問い合わせ先: 大妻女子大学木下勇ゼミ  
Tel. 03-5275-6981  
E-mail: isami@otsuma.ac.jp

詳しくはhpへ<https://www.sis.otsuma.ac.jp/aid-lab/ChristmasMarche/2023/>



# 能登の里海を守る：海育実践と地域活性化プロジェクト

細谷 夏実 教授

(社会情報学部 社会情報学科 環境情報学専攻)

## 1. はじめに

2011年に、我が国で初めて「能登半島の里海里山」が国連の世界農業遺産に認定されました。

私たちのゼミは、能登半島にある石川県鳳珠郡穴水町と隣の能登町で2015年から活動を始めました。現在は、里海里山保全につながる活動（地元の椿を活かした椿茶の開発等）や、子どもたちに海の大切さや楽しさを伝える海育（うみいく）の活動を行っています。

こうした取り組みがきっかけとなり、穴水町と本学は2018年に包括連携協定を締結しました。

2023年度も、地域のみなさんと共に能登の里海里山保全や地域活性化、海育に関わる活動を行い、さらに広く情報発信することを目指しました。

## 2. 活動内容

### 1) 能登での地域連携活動（2023年8月）

この夏はコロナウイルス感染拡大が落ち着いたため、人数や活動の制限なく、ゼミ生と共に穴水町のと町を訪れ、地域の方々と連携した活動を行うことができました。

穴水町の鹿波地区では、鹿波椿保存会の楠さんから、「鹿波椿茶」製茶過程について説明を受け、実際に椿葉を手もみしてお茶にする行程をお手伝いしました。また、穴水町中居地区では、松村水産の松村さんから、特産の牡蠣養殖や、地元で伝わる伝統漁で使用されていた「ボラ待ち櫓」を保全する取り組みについての思いを伺いました。さらに、中居湾で船に乗せていただき、牡蠣の養殖現場やボラ待ち櫓を実際に見学させていただきました。さらに、穴水高校では、生徒のみなさんと様々なテーマについて意見交換会を行い、能登ワインでは製造工場の見学を行いました。

能登町では、「のと海洋ふれあいセンター」で能登の海の生物観察を行い、海洋深層水製造施設「あくあす能登」では、深層水や塩を製造する様子を見学させていただきました。

現場でのお話や、見学・体験は、能登の里海里山の魅力を深く知ると共に、保全に取り組む際の問題などを地域の方と共有して考える貴重な機会となりました。



楠さんから、椿葉焙煎方法の説明を受ける



松村さんから、牡蠣養殖の筏の上で養殖についての話を伺う

## 2) 「能登展」での能登の紹介と物産販売（2023年10月）

ゼミでは毎年、大学祭で「能登展」を出展しています。今年もゼミの学生たちが、夏の能登での活動などをポスターにまとめて紹介しました。

さらに、鹿波椿保存会の方々や穴水高校の生徒さんたちと協同で商品化した椿茶や、あくあす能登で海洋深層水から作られた塩などの物産も販売し、能登の魅力を発信しました。

会場には、教育長をはじめとした穴水町の方もいらしてくださいました。また、能登展にリピーターで来場してくださった方も多く、ゼミの卒業生も訪ねてくれました。ゼミ生は町の法被を着て説明や販売に活躍しました。

### 3. まとめ

2023年度は、夏の能登での活動、秋の大学祭について、コロナ前と同様の規模や内容で実施することができました。地域の方たちとの連携を深め、能登の魅力も発信できたと考えています。



ポスター展示を見る来場者の方たち



ゼミ生が穴水町の法被を着て物産を販売しました

#### 〔追記〕

本年元旦に発生した能登半島地震では、穴水町、能登町も甚大な被害を受けました。これまでお世話になってきた方たちも被災されています。また、この地震で、1月以降に予定していた海育を中心とする地域連携活動は実施を断念せざるを得ませんでした。

穴水町、能登町を含めた被災地域の日も早い復興をお祈りすると共に、これからも引き続き、能登の里海里山保全、地域活性化に関して、私たちができることからお手伝いをしていきたいと考えています。

その第一歩として、2月から能登を支援するための募金活動を開始し、3月末には能登を舞台とした映画（「さいはてにて」）の上映会を開催しました。

# 多摩ニュータウン南大沢 40 年 CI プロジェクトと 高齢者と子どもたちのエンパワーメント支援

炭谷 晃男 教授

(社会情報学部 社会情報学科 情報デザイン専攻)

## 1. 経緯

2023 年に多摩ニュータウンの西部地域の拠点となる南大沢がまちづくり 40 周年を迎えました。まちびらき 40 年を経過した八王子市南大沢地区の再生プロジェクトに協力しながら、住民の方のエンパワーメントを支援するプロジェクトに取り組んだ。2021 年度にはオリンピック応援グッズの作製、2022 年度は「私たちの南大沢川柳募集」につづき、2023 年度はボッチャを通じて、地域の元気づくりと共生社会の実現をめざす「ボッチャ南大沢カップ 2023」を実施した。さらに、子どもプロジェクトとしての寺子屋活動は月に 1 回程度、八王子市内の小学校施設を借用して小学生のためのサタデースクールを実施するもので継続的に実施した。高齢者プロジェクトとしての高齢者サロン活動にも継続的支援に取り組んだ。

## 2. プロジェクト

### a. ボッチャ南大沢カッププロジェクト

八王子市南大沢は多摩ニュータウンにおける西部地区の中心的地域となっている。当該地区で活動している市民団体である「南大沢コミュニティネットワーク」との協働事業として、ボッチャを通じて地元南大沢の元気づくりと共生社会の実現に貢献しようと実施しました。

実施日 2024 年 2 月 25 日 (日) 13 時～16 時 30 分

会場 東京都立南大沢学園体育館

参加団体 企業、障害者、高齢者、子どもの 4 ジャンルの参加団体を公募し、当初 12 チームを想定していたが、応募多数であったことから、15 チームに拡大して交流戦を行った。まさに、車椅子の方、小学生のグループ、大学生のグループ、障がい者グループ、高齢者サロングループと多様な人々が、互角に勝負できるのもボッチャの特徴であることを再認識させられた。

参加して頂いたみなさんの反応は大変よかった。ただし、会場は 17 時まで撤収しなければならなかったため、各チームから 1 名ずつ出してもらい、「みんなでボッチャ」の交流し合いを行う予定でしたが、それができなかったのは残念でした。2024 年度も、好評だった「出前ボッチャ体験」を継続していきたいと考えます。

さらに、参加して頂いた皆さんとつながりを持ち、今後のつながり活動について、皆さんから要望を伺い、この企画を発展させていきたいと考えます。詳細は大会の報告書 (QR コード) を参照頂きたい。



ボッチャ南大沢カップ 2023 募集チラシの概要:

- 日時: 2024年 2月 25日 (日) 13:00~16:00 (12:30受付開始 13:00開会式)
- 会場: 南大沢学園体育館 (八王子市南大沢5-28)
- 参加条件: 八王子市在住・在学・在職の人を代表者とするチームとし、年齢・障害の有無は問わない。また、予選リーグを通過した場合に、決勝トーナメントにも出場できること。
- 定員: 12チーム(1チーム3~6名) (申込多数の場合は抽籤(2/5までに参加可否をご連絡します))
- 申込方法: 専用エントリーシートに記入して下記受付窓口へ直接持参いただくウェブサイトから手続きのいずれかでお申し込みください。  
受付窓口: はこちらがポストボックス (下場ビル10号) 生涯学習センター南大沢分館 (南大沢2-27 2階) 高齢者あんしん相談センター南大沢(南大沢2-17-5) お問合せ:  [bocciia.mimamioosawa@gmail.com](mailto:bocciia.mimamioosawa@gmail.com)

### ボッチャ南大沢カップ 2023 募集チラシ



ボッチャ南大沢カップ 2023 開会式



### b. 子どもの居場所プロジェクト：寺子屋

大妻多摩キャンパス周辺の八王子市立松木小学校、長池小学校で月に1回程度土曜に学校の教室や体育館を借りて子どもの活動を支援する寺子屋活動を実施している。寺子屋の活動内容としては寺子屋学習教室（漢字検定）、ボッチャ、プログラミングカー、万華鏡教室はじめ Xmas や正月ゲームなど季節行事もやっている。ペットボトルロケットにより SDGs の学びにつなげた。この寺子屋でもボッチャ教室を行い、はじめてボッチャをする方々への体験会を実施した。2月寺子屋では、ボッチャ南大沢カップ直前という事もあり、教室に多数参加していただき、プレ予選会さながらであった。また、3月には寺子屋の締めくくりとして「竹たま里山まつり」を堀之内寺沢里山公園で実施した。3年ゼミ生総出で取り組んだが、1時過ぎからあいにくの雨になり、その時点でイベントを中止した。

「竹たま里山まつり」についてタウンニュースに記事（右 QR コード参照）が掲載されました。

### c. 高齢者の居場所づくり：高齢者サロン

ボッチャは、老若男女誰でも、障害の有無を超えて楽しめるユニバーサルスポーツとしてボッチャがオリンピックのレガシーとして定着してほしいと願ってこれまで取り組んできた。高齢者サロンで障害者と高齢者が一緒になってプレイを楽しむことができた。何気ない風景だが感動を覚えます。ただ、高齢者スマホ教室ができなかったのは残念だった。来年度は高齢者のデジタルディバイドに向けた活動を行う予定です。

## 3. 結び

以上のように、23年度の活動としてはボッチャ南大沢カップ 2023 が中心となったが、こどもプロジェクトとしてもボッチャ教室を実施した。高齢者プロジェクトでも、各サロンにおじゃましてボッチャ体験を実施させていただいた。その意味で、私たちの 2023 年度の活動はボッチャが横つなぎしていた。さらに、学生達にこのような地域社会で、他の団体とのコラボレーションを通じて、子どもや大人にかかわる機会を与えて頂いた「大妻女子大学地域連携プロジェクト」に感謝申し上げます。



寺子屋でのボッチャ教室



竹たま里山まつり



高齢者サロンでの出前ボッチャ体験

## 里親家庭の子どものピアサポート活動

山本 真知子 准教授  
(人間関係学部 人間福祉学科)

### 1. プロジェクトの目的

近年、虐待などさまざまな理由で実の家庭で生活できない子どもたちを家庭で養育する里親やファミリーホームが注目されています。日本では里親やファミリーホームを増やすために様々な取り組みを行っており、里親家庭で生活する子どもも年々増加しています。本プロジェクトは、NPO 法人東京養育家庭の会の支部と東京都児童相談所等と連携し、里親やファミリーホームの子どもたちが他の家庭の子どもや学生とのつながりを持つ「子どもスペシャル」の実施や「里親家庭の実子の会」を行いました。他の里親家庭の子どもとの関係を作り、相互交流を深めることを子ども側の目的とし、学生にとっては社会的養護の理解、子どもの理解、児童相談所や児童福祉施設とのつながり、他大学生との交流等の学習機会を得ることを目的としています。

### 2. プロジェクトの概要

9月2日に「里親家庭の実子の会」を高尾の森わくわくビレッジにて行いました。子どもの参加人数が少なかったため、参加学生は1名で、その他ファシリテーターが参加しました。当日は小学生の里親家庭の実子と工作や風船等で遊んだり、話し合いを行ったりしました。



クラフトの様子



話し合いの様子

また、11月23日に「子どもスペシャル」をNature Factory 東京町田にて行いました。駅から遠方であることや翌日の準備も兼ね、学生は前日から現地に宿泊し実施をしました。学生の参加は大妻女子大学人間福祉学科の山本ゼミ4年生9名、3年生10名が参加しました。その他の参加者は、里親、里子、里親家庭の元委託児童（OG/OB）、児童相談所職員、乳児院・児童養護施設の里親支援専門相談員、里親支援機関の職員、ファシリテーター、他大学の学生、総勢100名を超える人数でした。

子どもスペシャル当日は、幼児・小学生の子どもたち約30名の活動を他大学の学生とともに行いました。1か月前にクマが会場近くに出没したため安全を配慮し、室内でミニ運動会やクラフト作成を行いました。ミニ運動会では、パン食い競争やしっぽ取りゲームを行いました。中学高校生の子どもたちが昼食を作ってくれたものをみんなでいただきました。

中学高校生は、午後里親家庭で育った経験者の方からお話をうかがい、自由にこれからの生活のことや今抱えている気持ちをファシリテーターと共に話す時間を持ちました。



参加した学生の様子



学生のチーム対抗のしっぽ取りゲーム

### 3. プロジェクトの成果

本プロジェクトを行うことによって、子どもたちの横のつながりができることがとても大きな成果でした。子どもたちは普段は学校も異なり、住んでいる地域も離れていることで交流することは難しいため、子ども同士が交流できる機会があることは非常に大切です。また、学生にとっては実際に里親家庭の子どもと接することで、それまでの机上だけの学びのイメージを変えることができ、児童相談所や児童養護施設等の社会福祉専門職との出会いから学ぶことができました。今年度は卒業生も参加し、先輩と後輩のつながりを持つことができました。

### 4. 今後に向けて

本プロジェクトに参加した学生からは「午前と午後とで子どもたちの関係性や表情に違いがみられて非常に勉強になった」という声や、「第三者という独立した立場でありながら、子どもの権利や社会的養護などについて十分な知識理解を有し、専門的なスキルを持つファシリテーター養成の必要性を感じました」といった感想が聞かれました。大学の学びだけではなくプロジェクトに参加することで学びが深まる様子もあり、社会福祉士等の実習にも発展させることができました。実際にこの活動を通して、児童相談所や里親支援に携わる就職を目指す学生もいます。

児童相談所や里親からも、学生に安心して任せていられるといった声や、今後も継続してこの活動に参加してもらいたいといった声も聞かれました。この活動は経済的な支援や人材的な支援が非常に必要であり、どの地域でも里親家庭のこどもの横のつながりが持てるわけではありません。地域と連携して大学にある資源等を活用することで、子どもたちとの関わりを持つことができています。地域と連携することで、社会への貢献と学生にとっては学ぶ経験ができる双方にとって価値のある活動となっています。今後も子どもたちの意見を取り入れ、里親や児童相談所等と連携し継続して活動していきたいと考えています。

# 環境と食の調和に着目した健康づくりの推進 ～産官学民連携・中高大連携による取り組み～

堀口 美恵子 教授

(短期大学部 家政科 食物栄養専攻)

## 【目的】

環境（地球環境・体内環境）と食に関連する問題は、持続可能な開発目標（SDGs）に影響を及ぼす重要な要素である。本プロジェクトでは主に千代田区民を対象に、環境と食の調和に着目した健康づくりを産官学民連携、及び、中高大連携で取り組み、心身の健康づくりを推進することを目的とした。

## 【方法】

代表者が今まで培ってきた千代田区や世羅町との関わりを活かし、栄養士を目指す本専攻の学生が卒業生と連携しながら、健康づくりの推進に向けた取り組みを行った。なお、本プロジェクトの成果については、10月21日（土）の「大妻祭」、12月6日（水）から8日（金）に東京ビックサイトで開催された「エコプロ 2023」、3月17日（日）に千代田区役所で行われた「ちよだコミュニティ ラボライブ！2024」において報告した。

## 【主な活動内容】

1) 「和食：日本人の伝統的な食文化」はSDGsの達成に貢献するという観点から、「大妻和食アカデミー」を本学調理室で実施した。講座（栽培環境と品種の特徴、糠の活用等）、及び、数種の米や考案した食品ロス削減ふりかけ等の食べ比べを行い、ご飯を中心とした日本型食生活は環境と食の調和に着目した健康づくりについても見直す機会となった。

2) 食品ロス削減レシピ（規格外として廃棄されてしまう世羅梨やサンチュの粉末、及び、糠、おから等の活用）を考案し、子ども食堂等で提供した。また、それらのレシピを絶滅危惧種のダルマガエルを保護しながら無農薬で栽培する世羅米のおにぎりの具としても活用し、世界食糧デーに合わせたイベント「おにぎりアクション（世界の子ども達へ給食を提供する活動）」に取り組んだ。また、卒業生が考案したサンチュ粉末を用いた米粉のスコーン（世羅梨ジャム添え）を「大妻さくら祭り 2024」の小学生講座で提供し、食と環境の大切さについて楽しく伝えることができた。




3) 千代田区主催の「アーバニスト@千代田」の一環として、「身体を動かす！一緒に楽しむ！つながる！合同体験会」を本学アリーナで行った。大妻中学高等学校校長夫妻による太極拳と朗読、「千代田区立障害者福祉センター えみふる」によるボッチャ、「上智大学インカレボランティア団体 シャクル」によるウォーキングサッカー、「大妻女子大学食育ボランティアグループ ぴーち」による食育を実施し、区民の健康づくりや多世代交流に寄与することができた。

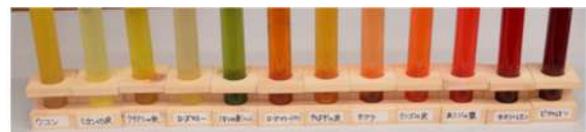
4) 大妻祭では、食育体験、エコなクラフト体験、エコバック作りの各コーナーを設け、多くの来場者に楽しみながらSDGsについて体感してもらうことができた。衣料品廃棄ゼロを目指す四番町の企業(株式会社 R1000)より提供を受けた廃棄予定の布などをミカンやリンゴの皮、クチナシや藍の色素などで染色し、世羅町のラベンダーを包むサシェを作成したことは癒しのイベントとして大変好評であった。



5) 株式会社 R1000 と連携してコタカフェ前スペースで実施した「SUSTAINABLE FESTA」では、不要な衣類とサンプル品との物々交換、エコなクラフトの紹介を行った。また、食品ロス削減レシピ(コタカフェの協力によるサンチュ粉末入りクレームブリュレ)も提供し、資源の有効活用について改めて考えて頂く良い機会となった。さらに「大妻さくら祭り 2024」ではリメイク講座を開催し、アップサイクルについても多世代の方々に理解を深めて頂くことができた。



6) 本プロジェクトの成果については、「大妻祭」、東京ビックサイトで開催された「エコプロ 2023」、千代田区地域コミュニティ醸成支援事業の一環として千代田区役所で行われた「ちよだコミュニティ ラボライブ! 2024」で報告し、評価を得ることができた。なお、「ちよだコミュニティ ラボライブ! 2024」では「千代田の活動紹介&ネクストステップ交流会」の話題提供者として、共創チャレンジに向けた新たなネットワークを構築することができた。



### 【まとめ】

環境と食の調和に着目した心身の健康づくりを、産官学民連携・中高大連携による取り組みとして推進することができた。また、人々の健康と幸福に貢献する栄養士を目指す本専攻の学生が、環境と食の調和に着目した食育に主体的に取り組んだ本プロジェクトにより、学生の学習意欲向上やキャリアデザインにつながることも期待された。

栄養士の立場からSDGsに着目した食育に取り組み、人々の食・健康・環境に対する意識の向上を通じて、心身の健康づくりに貢献しています。

**I. エコな食材を活用し、おにぎりアクションに参加!**

- 1 タルマガエル米 (絶滅危惧種のタルマガエルを保護しながら無農薬で栽培する世羅米)
- 2 昆布パウダー (出汁をとったあとの昆布を活用 # ザキャピトルホテル東急)
- 3 炒り糖 (食べるいりぬか # 米屋吉田屋)

**II. 食品ロス削減レシピを考案し、子ども食堂などで提供!**

- 1 規格外の世羅梨 (形や低糖度などの理由で廃棄となってしまう世羅梨を活用)
- 2 規格外のサンチュ (常温保存可能としたサンチュ粉末を活用 # kamaya\_santyu)
- 3 エコクッキングレシピコンテスト

**III. エコなクラフト(廃棄部分による染色、廃棄衣料の活用、米紙袋の活用)!**

- 1 みかんの皮、りんごの皮、使用後のクチナシの実、和グルミ果肉などの色素による染色。
- 2 世羅ワイン製造過程で出るブドウの搾りかす、世羅茶製造過程で出る粉末を活用した染色。
- 3 廃棄衣料などを活用した藍染め (藍は学内で育て、茶や菓子材料としての活用も)。
- 3 再利用禁止の米紙袋をペーパービーズとして活用 (アクセサリ、ストラップなど)。

世羅ワインの搾りかす  
— ピンク色の染色

世羅茶の粉末  
— 黄色の染色

「エコプロ 2023」における活動報告の一部

# 市民と育てる「多摩市立中央図書館」サポートプロジェクト —開館前準備から開館後の市民参加イベントの開催—

深水 浩司 常勤特任教授  
(教職総合支援センター)

## 1 はじめに (プロジェクト概要とその目的)

本プロジェクトは、多摩市に2023年7月開館した新たな図書館(多摩市の中央図書館的存在)を、市民とともに利活用をするため(利活用の促進も)に企画したものである。できる限り市民の方々と一緒に「図書館を育てる」ことができるようなきっかけづくりをひとつの目的としている。

大学での様々な教育や活動を、図書館という仕組みを利用して地域や市民に還元できるかどうかのも一つの目的(チャレンジ)であったが、いうまでもなく、大学司書課程等で学ぶ学生の資質向上や大学外での経験や機会の提供もそれらには含まれている。

プロジェクトは、2023年度を通じて、以下の4つのイベント等で構成され実施された。

- ① 多摩市立中央図書館開館準備サポート (5月14日～6月25日の土・日曜に実施)
- ② 大学生がお勧めする新図書館利用法の提案 (図書館ツアーとともに、9月10日実施)
- ③ 高齢者向け図書館カフェ (10月22日、11月5日実施)
- ④ 一般利用者向けビブリオバトル (12月17日実施)

以下、イベントごとに報告する。

## 2 多摩市立中央図書館開館準備サポート

多摩市立中央図書館は2023年7月1日開館されたが、それに先立ち、新規に入手した資料や地域館から集めた資料を、開架・閉架書庫に排架する作業を行わなければならない。2022年中ごろから多摩市立図書館を通じてお手伝い可能な学生がいないかとの要請もあり、それに応えることと、参加学生にとっては、新規開館する図書館を開館前に手伝いながら見学できる貴重な体験の提供もねらいであった。



学生と生徒による書架整理

開館準備サポートは、本プロジェクトが採択される前から企画しており、5月14日から、ほぼ毎週土・日曜に実施した(10時から16時頃まで)。本学学生だけではなく、大妻多摩中学高校の生徒の協力もあり、6月25日までの間、延べ約80名からのサポートを提供できた。作業内容は閉架・開架書庫への資料配架や資料データバーコードの読み取り・変更、新規資料へのラベル貼りなど多岐にわたった。6月10日には、地域ケーブルテレビの多摩テレビ様からの取材もあり、後日放送された。

## 3 大学生がお勧めする新図書館利用法の提案 (図書館ツアーとともに)

新図書館ではフロア別に利用形態を分け、2階は静寂フロア、3階をお話やグループで利用できるラーニングコモンズを配した活動フロアとした。ラーニングコモンズや複数の活動室を大学生ならどう使うかを提案し、参加者とともにディスカッションすることを主たる目的としたイベントである。せっかく参加してもらうのなら、何かお土産を…と学生を共に考えたのが和装本づくりである。

これは、私が担当している司書課程授業でも時折実施しているもので、和紙と麻糸、でんぷん糊で冊子を作成し、メモ帳などに利用していただくことを狙っていた。イベント午前中に教員と学生とが指導しながら作成し、そのまま持ち帰って頂いたが、参加者からは「もったいなくて使えない」という温かいコメントも多く寄せられた。

午後は、新しい図書館のツアーを学生のガイドで実施した。ツアーのすべてを学生自ら考えガイドし、新しい図書館の見所や利用ポイントなどを紹介した。その後、「新図書館の利用方法」をプレゼンし、最後に参加者全員のディスカッションで締めくくった。

#### 4 高齢者向け図書館カフェ

昨年も実施したこのカフェは、図書館をあまり利用しない高齢者向けに、図書館と本に親しんでもらいつつ、若者との交流も図る目的で企画された。昨年は「認知症カフェ」としたが、本年は認知症に拘らずより広い高齢者を対象としたものとした。

医師とカウンセラーによる事前研修を10月1日に実施、その後、10月22日と11月5日の2回に分けて（参加者は2回とも参加）開催された。今回は、参加学生と参加者が同じ本（『日の名残り』カズオ・イシグロ著）を事前に読み、その感想も語り合えるようにした。同書籍は図書館所蔵数が少なく、プロジェクト費用からの出費を依頼したが、残念ながら書籍購入は認められず、学生分の書籍代は代表者の自己負担とした。2回実施されたカフェでは、高齢者1名につき、最低1名の学生が担当し、図書館での本の探し方や選択のサポート、読書後の感想を語り合うなど、1回2時間という短時間ながら、密度の濃いコミュニケーションをとることができた。広報が不十分で、高齢者の参加者は4名にとどまった。

#### 5 一般般利用者向けビブリオバトル

ビブリオバトルは、プロジェクト参加学生の核となっている「図書館サークル Olive」で定期的に行っている活動でもある。新型コロナの感染を危惧して3年間は実施できておらず、現サークル員は初めての企画・運営となった。今回のビブリオバトルは、「多摩市立図書館開館50周年記念イベント」でもあり多摩市としても名実ともに力を入れたイベントとなった。

12月7日 17:00から休館日の図書館でリハーサルを行い、12月17日 午前は中高生を、午後は大学生から一般の方をバトラーとして開催した。両部とも、バトラー、オーディエンス合わせて20名程度の参加者があった。すべての進行を学生が担当し、図書館スタッフ3名はサポート役に。進行用台本作成や、バトラー発表時のパワーポイントスライド作成もすべて学生によるものである。3年ぶりの対面開催で、サークル員にとっては緊張する初めてのビブリオバトルだったが、貴重な体験ができたと確信している。なお、中高生の部では、多摩テレビ様による取材があり、後日放送されている。参加者からは、来年も開催してほしいなどの感想も頂いた。

#### 6 おわりに

複数イベントで構成されたプロジェクトだったが、どのイベントでも参加した大学生や中高生が積極的に市民に対するサポートやイベントの企画・運営を行っていたのが印象的であった。多摩市立図書館や多摩市長の阿部氏からは、来年度も大妻学院と市民とともに地域と連携したイベントを企画してほしいとの要望を受けている。学生や生徒と共に要望に応えられるように努力する所存である。



学生による館内ツアー



ビブリオバトル中高生の部

# 令和5年度 地域貢献プロジェクト報告

## 地域貢献プロジェクト概要

### 1. 趣旨

広く地域のみなさまへ本学の教育と研究成果を還元し、みなさまの多様な学習ニーズに応えるとともに、地域社会の教育、学術、文化の発展に貢献する活動の推進を図ることを目的に、その活動経費を補助する。

### 2. 対象テーマ

本学の教育と研究成果を地域社会に還元し、地域社会の教育、学術、文化の発展に貢献する活動。分野は不問。

### 3. 応募資格

- ・本学の教職員（個人又はグループ）
- ・本学の教職員と学生（大学院生・短大生を含む）で構成されるグループ

※学生のみでは応募不可。

※申請代表者は専任教職員に限る。

※申請代表者としての申請は1件に限る。

### 4. プロジェクト支援期間

令和5年5月11日(木)～令和6年3月31日(日)

### 5. 支援額及び採択件数

支援額：1件につき30万円を上限

採択数：数件程度

## 地域貢献プロジェクト採択一覧

プロジェクト名	代表者
親子で楽しくパン作り教室	岩瀬 靖彦
健康への食意識向上とがんの食を支える「食べて・動いて・整える～自分に恋して～」の取り組み	川口 美喜子
小学校の読書活動推進への貢献を図る学生ブックソムリエの展開	樺山 敏郎
黒海ギリシャ人の歴史と音楽※	渡邊 顕彦

※ギリシア政府の事情により実施が中止となった。

## 親子で楽しくパン作り教室

岩瀬 靖彦 教授  
(家政学部 食物学科)

現代の子育て世帯は、両親の共働きによる影響などで、家庭における食事作りの時間が短縮化され、外食や中食、総菜、レトルト食品、冷凍食品などの利用頻度が年々増加傾向にある。

そのため親から子への食事作りの伝承が減り、併せて親子の会話も減りがちとなっている現状が伺える。

一方で食事のスタイルは、朝食は手間のかかる和食から、手軽に準備ができる洋食が主流となりつつある。また、洋食スタイルの食事では、主食が米に代わりパンが一般的となっているが、地域のスーパーやパン屋、ネットで購入するケースが大勢を占めていることから、益々、家庭における食事作りが簡素化し食事作りの伝承が減り、親子の会話も減る一方であることが伺える。

このような現代の子育て世帯の状況を支援することを目的として、また、ご家庭でも手軽にパン作りができることを理解していただくために、本学でサークル活動をしているパン調理学研究会が主体となり、パン作りの指導を専門とし、実績のあるパン技術研究所の並木利文先生を講師として招聘し、親子で楽しく手ごねによるパン作り教室を開催した。

「親子で楽しくパン作り教室」は参加する児童の年齢で3回に分けて、1回あたりの募集は6家族とし、1家族最大4人までとして参加者を募集した。

第1回は小学校就学前の3～6歳の子供を持つご家庭、第2回は小学校1～3年生の子供を持つご家庭、第3回は4～6年生の子供を持つご家庭とした。第1・2回は本学の調理室では調理台に身長が合わないことから、フロアマットとローテーブルをレンタルし、子供目線で実施した。第3回は調理実習室において実施した。参加者された保護者は、子供たちと協力し手捏ねパンを楽しく作っていた。また、手軽に手作りでパンが作れることに驚き、焼きあがりのパンを試食し美味しさに感動していた。

講師の並木先生からは、「今回、バターロール配合のパンを手捏ねで作りました。パン生地を初めて捏ねる方が多かったと思いますが、しっかり捏ねることができました。パンは発酵を伴うので時間がかかりましたが、親子でいっしょにハムマヨロールやウインナーパンなどふっくらパンをつくることになりました。焼き上がったばかりのパンを美味しそうに食べている子供の笑顔が嬉しかったです。」との感想をお寄せいただきました。

また、食材の発注からサポートしてもらった食物学科の阿部助手、山下助手からは、「助手として運営も含めて参加させていただきました。未就学児から小学校高学年まで、様々な年齢のお子さんとそのご家族に参加していただき、どの日程も、教室の名前通り『親子で楽しくパン作り』をされておりました。参加された親御様より、『家でまとまった時間をとって調理をさせることは難しいので、とても良い機会となりました。』『手作りでこんなにおいしいパンが作れるなんて感激でした。家でも作ってみます。』などと直接感想を伝えてくださり、とても嬉しかったです。来年度も地域貢献プロジェクトを通して、人々のつながりや、地域活性化につながるよう、助手の立場としてサポートしていきたいです。この度は素敵な教室を開催していただき、ありがとうございました。」との感想が寄せられた。

中心となって「親子で楽しくパン作り教室」をサポートしてもらった本学のパン調理学研究部からは、「地域の方と交流するという機会はあまりない為、とても貴重な経験になりました。また、「パン作り」を通しての交流であったため楽しく参加することが出来ました。」との感想が寄せられた。少しでも本学の地域貢献プロジェクトに貢献できていれば幸いです。



## 健康への食意識向上とがんの食を支える 「食べて・動いて・整える～自分に恋して～」の取り組み

川口 美喜子 教授  
(家政学部 食物学科)

大妻女子大学内において学内職員と学生を対象とし、がんに不安を感じているまたは、生活習慣病予防のための運動と食事、発症後の改善のために食と運動について行動しようと考え始めしている方のためのイベントを行った。

テーマは「食べて 動いて 整える～自分に恋して～」として、学内にポスターを掲示して周知した。運動は、外部から専門の方に入っていただきヨガ教室を開催した。食事の提案と試食は、野菜摂取やバランスの良い食事のとり方を目指したスムージーやスープの試食を行った。試食会の開催時には、がんについては専門家によるがんとがん栄養についての相談会を実施した。学生が、イベントの参加者に対してヨガによる健康的なからだ作りに対する意識、スムージーやスープの提供による食への意識の変化、がんの栄養についての意識調査を実施した。

ヨガは、「つなぐ」、「結びつける」という意味を持つ。心と体を結び付けて自分自身を見つめ、サーマディ（悟り：すべてのことから解放され、形や時を超えた悟りの境地）に到達するための過程であるとされている。ポーズによって普段使わない筋肉が伸ばされて血流がよくなり、身体の柔軟性が増し、呼吸法や瞑想などの多面的なアプローチによって、心血管機能、呼吸機能の維持や抑うつ気分の改善、認知機能の維持など心身ともに効果が期待できる。ヨガをイベントのプログラムに取り入れることで「がん」と共に生活している方々の心身と自律神経の回復ができ、日常に運動を取り入れてみようと思う機会になる。

野菜や果物は、健康維持や生活習慣病の予防に重要であるが、十分に摂取できていないのが現状である。スムージーは簡単に野菜や果物を摂取するのに有効な方法のひとつである。野菜2種 + 果物1種 + その他（ナッツ、牛乳、ヨーグルト、豆乳など）2種をくわえ、砂糖やはちみつなどは使用しないで食材だけをミキサーにかけて仕上げる。おいしく仕上げるために、色の同じ食材、あるいは色が混ざらない食材を合わせて、赤、黄、白、緑、紫色のスムージーを提供した。健康維持に加え、食への意識変化を促すことに繋がった。また、料理集「時短、簡単、心うれしい料理」と「スムージーとスープのメニュー集」を配布し、身近な食材と調理でバランスの取れた食事をとることの情報を伝えた。



ヨガの様子



紫のスムージー



オレンジのスムージー



緑のスムージー

職員や学生の日常生活における体調管理の課題に、不眠、便秘と下痢の排便コントロール、貧血が明らかとなり、メーカーから改善のためのサプリメントの提供を受け職員と学生に配布を行った。



サプリメントの試供

- ・鉄サプリメント
- ・食物繊維
- ・安眠効果 L-テアニン

卒論生の「学内における生活習慣とがんに対する運動と食のイベント開催について」の研究として、開催時には参加者に対して Google フォームの質問票を用い、体験教室後にアンケート調査を実施した。

「令和5年度地域貢献プロジェクト」探検の活動  
**第1回 食べて動いて整える**  
 ♡♡♡自分に恋して♡♡♡  
 ヨガ教室&体に優しいスムージー&個別がん相談

♡日時：10月17日（火）  
 ♡ヨガ 17:30~18:20  
 本館11階 第4会議室  
 ♡スムージーとフルーツ 18:00~  
 ♡とオレンジのスムージー  
 コタカフェ

♡がん相談コタカフェにて

お問合せ先：  
 臨床栄養管理研究室 川口美香子  
 mikiho-kawa@gotsuma.ac.jp

セディ美香子（ヨガ講師 ラクシマイサンガ ヨガの会）  
 ♡五感を研ぐ  
 お疲れの心身にやさしいヨガの時間

宮城典子（管理師 認定NPO法人マキス表示）  
 ♡がん情報あれこれ  
 ♡がんと共に生きる  
 ミニミニ相談会の開催

今年度、スムージーのフルーツは東京農工大学  
 農学部果樹部門 伴塚也准教授との連携に  
 よって果樹園から直送のフルーツを使用します。

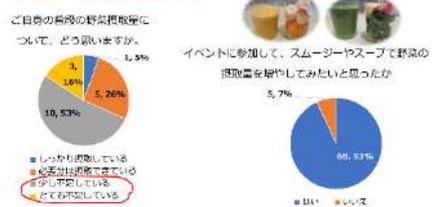
4. 食生活への意識の変化について



2. 運動習慣への意識の変化について



3. 食生活への意識の変化について



アンケートの実施 食物学科 根本奈奈美

1. 参加者（4回のアンケート結果 延べ73名）



5. 「がん」の栄養について関心について



学内職員や学生には、がんや健康面、食生活や食習慣についての不安の声が多くある。学内では、今までその不安の声に気軽にみんなが集まって話し合える場所がなかった。イベントの2年間の継続は、がんや健康面への不安を解消する場の提供として有効であった。イベントががん患者やその家族、健康に不安や戸惑いを持つ方にとっての拠り所となるため、イベントの開催は意義があったと考えられる。

# 小学校の読書活動推進への貢献を図る学生ブックソムリエの展開

樺山 敏郎 教授  
(家政学部 児童学科)

## プロジェクトの概要

本プロジェクトは、本学家政学部児童学科児童教育専攻の学生（2年次中心）が千代田区立麴町小学校の読書活動の推進に貢献しようとするものである。

実質的には、読書の秋という時機を捉えて同小学校を訪問し、学生がブックソムリエとなって、児童に対して本の紹介や推薦を行う。

## 1 プロジェクトの目的

児童の読書活動を活性化することは、児童自身の在り方や児童を取り巻くヒト・コト・モノに対する新たな知見を獲得し、これまでの見方や考え方を問い直すとともに、豊かな感性や情操を養うことにつながる。小学校の教員を目指す本学科児童教育の学生が実際に小学校の現場を訪れ、読書のよさや醍醐味を言葉で伝えることにより、その価値や意義を児童と共有する意義は大きい。

## 2 プロジェクトの内容

読書の秋という時機を捉えて千代田区立麴町小学校を訪問し、学生がブックソムリエとなり、児童に対して本の紹介や推薦を行う。ブックソムリエという用語は、一般化されてはいない。代表者が独自にネーミングしたもので、文字通り、本の紹介・推薦する活動である。単に本の粗筋や感想を伝えるだけでなく、相手とやり取りしながら、紹介・推薦する本の世界に巻き込み、相手が“読んでみたい”と思うように誘う活動である。

取り上げる本については、小学校国語科教科書の文学的教材（昔話、民話、伝承、物語、ファンタジー、詩など）が書籍化（絵本化）されたもの、併せて国語科教科書の文学的教材と関連して紹介されている教育的価値が高いとされる本や絵本などを取り上げる。

## 3 活動の概要

2023年5月25日

☑本プロジェクトの目的や方法、活動の具体についてのガイダンスの実施

2023年6月～10月

☑関連図書の読書活動の展開

2023年9月28日

☑ブックソムリエの具体的な進め方についてのガイダンスの実施

2023年10月12日

☑ブックソムリエに向けての準備

2023年11月23日

☑千代田区立麴町小学校でブックソムリエ活動の実施

2024年1月～2月

☑本プロジェクトのまとめ

#### 4 活動の実際

2023年11月24日 ☑千代田区立麹町小学校（第1、2、3学年）でブックソムリエ活動の実施



紹介する本をブックメニューにして



本の世界に導かれる子どもたち



事前に本の読み方も勉強しました



ソムリエになって子どもを知る

#### 5 総括

小学校の教員を目指す本学科児童教育の学生が実際に小学校の現場を訪れ、読書のよさや醍醐味を言葉で伝えることにより、その価値や意義を児童と共有する意義は大きいものがあった。2年生と3年生の児童は、昨年度のことを覚えており、学生の訪問を楽しみにしていた。本活動を終えた学生の感想の中には、「小学生がこんなにも喜んでくれて、準備して臨んだ甲斐があった」「やはり小学生は純粹であり、小学校教員になりたいと強く思った」などがあり、大きな成果を得ることができた。

# 大妻さくら祭り2024

日時：令和6年3月16日(土) 10:00～15:00

メイン会場：千代田キャンパス本館 E棟・F棟

特別企画会場：博物館

来場者数：1,004名

## パンフレット表紙デザイン画

応募期間：令和5年11月1日(水)～令和6年1月8日(月)

応募資格：小・中・高・大学生

応募総数：12点

賞：上位5点を入選作品とする。

1位：表紙1面に掲載(賞状、図書カード5千円)

2～5位(4点)：裏表紙1/4面に掲載(賞状、図書カード3千円)

入選作品発表

①パンフレット

②パネル展示：E棟5Fエスカレーターホール

## 俳句大賞

応募期間：令和5年11月1日(水)～令和6年1月8日(月)

応募部門：小学生以下の部、中学・高校生の部、一般の部

応募テーマ：身体、気象

応募総数：652名 2,556句(身体1,319句 気象1,237句)

※部門ごとの( )内の句数は、審査対象外の句を除いています。

賞：理事長・学長賞 全テーマ、全部門から6名(賞状、図書カード5千円)、受賞者6名

優秀賞 各テーマ、各部門から3名(計18名)(賞状、図書カード3千円)、受賞者17名

受賞作品発表

①パンフレット

②パネル展示：E棟5Fエスカレーターホール

## イベント「春休み小学生講座」

- ・「春休みクリエイティブ・アートラボ『どんなものが作りたいかな?』」(講師：金田 卓也教授)
- ・「光の不思議－虹をつくろう!」(講師：金 美京常勤特任講師)
- ・「食品ロスについて考えよう!」(講師：堀口 美恵子教授)
- ・「エコなりメイクに挑戦してみよう!」(講師：堀口 美恵子教授)
- ・「千代田にプラネタリウムがやってきた!－春の星座と星ものがたり－」(講師：木村 かおる常勤特任准教授)

## 特別講座「日本の手仕事を体験しよう！」

- ①「みそボールをつくろう」(外部講師：井上 祐子氏)
- ②「水引の基本結び『あわじ結び』を結んでオリジナルポチ袋を作ろう」  
(外部講師：舟木 香織氏)
- ③「季節の和菓子をつくろう」(外部講師：安田 由佳子氏)

## 連携協定締結団体イベント

- ・「丘のまちびえい」の魅力発信(北海道美瑛町)  
北海道美瑛町の食材を使ったコロケやスイーツなどを販売
- ・「ホテルスタッフから学ぶ、テーブルナプキンのおもてなし講座」(東京ステーションホテル)
- ・「JAL 折り紙ヒコーキ教室」(JAL スカイ)
- ・「マーシャリング体験」「ミニトーイングトラクター搭乗体験」(JAL グランドサービス)

## 課外活動団体のイベント

- ・「パネルシアター公演」(パネルシアター部)
- ・「裏千家茶道のお点前披露と体験」(裏千家茶道部 和ちよぼ)
- ・「バルーンアート体験」、会場のバルーン装飾(バルーンアート同好会「ばろん。」)
- ・「はじめての手話教室」(手話サークル ひまわり)
- ・「手作りアクセサリー販売」(Hand Made サークル「bell époque」)
- ・「紙コップ工作でエコを考えよう！」(環境クラブ S.O.W)

## 大妻嵐山みつばちプロジェクト

大妻嵐山中学校・高等学校で飼育しているみつばちから採取したはちみつの販売、加工等

- ・「みつろうキャンドルをつくろう」(体験教室)
- ・みつろうキャンドル、みつろうハンドクリーム(販売)
- ・嵐山の秘蜜(試食)

## パネル展示

- ・千代田学事業報告：千代田区内の大学が千代田区に関するさまざまな事象を調査・研究
  - ・俳句大賞発表：受賞作品をパネル展示
  - ・パンフレット表紙デザイン画入選作品発表：入選作品をパネル展示
  - ・地域連携プロジェクト・地域貢献プロジェクトのパネル展示
- 会場：E棟 5F エスカレーターホール

## 特別企画(大妻女子大学博物館)

- ・「掛け軸から見た大妻の教育」ほか

## その他

千代田学事業報告、学食体験(kotacafé)、焼きたてパンの販売(KOTAKA KITCHEN)

## 事業内容

### 1. 地域連携プロジェクト

大妻女子大学では、教職員・学生によって様々な地域連携活動が行われています。教職員のグループ又は教職員と学生のグループによる、学生の主体性や自立心が身に付く地域連携活動の一層の推進・発展を図ることを目的に、その活動経費を補助する「地域連携プロジェクト」が平成 25 年度から始まりました。

令和 5 年度は 12 件の申請中 12 件が採択されました。

申請受付	令和 5 年 5 月 11 日(木)～令和 5 年 6 月 6 日(火)
結果通知	令和 5 年 6 月 16 日(金)
授与式、事務説明会	令和 5 年 6 月 24 日(土)
プロジェクト支援	令和 5 年 5 月 11 日(木)～令和 6 年 3 月 31 日(日)
活動報告	「大妻さくら祭り 2024」パンフレットへの活動報告掲載 大学ウェブサイトへの活動報告動画掲載

### 2. 地域貢献プロジェクト

大妻女子大学では、様々な地域貢献活動が行われています。広く地域のみなさまへ本学の教育と研究成果を還元し、みなさまの多様な学習ニーズに応えとともに、地域社会の教育、学術、文化の発展に貢献する活動の推進を図ることを目的に、その活動経費を補助する「地域貢献プロジェクト」が平成 26 年度から始まりました。

令和 5 年度は 4 件の申請中 4 件が採択されました。

申請受付	令和 5 年 5 月 11 日(木)～令和 5 年 6 月 6 日(火)
結果通知	令和 5 年 6 月 16 日(金)
授与式、事務説明会	令和 5 年 6 月 24 日(土)
プロジェクト支援	令和 5 年 5 月 11 日(木)～令和 6 年 3 月 31 日(日)
活動報告	「大妻さくら祭り 2024」パンフレットへの活動報告掲載 大学ウェブサイトへの活動報告動画掲載

### 3. 地域連携推進センター自主企画等

#### (1) センター自主企画

##### ① 大妻みちあそび

令和 5 年 7 月 22 日(土)10:00～12:00、13:00～15:00

参加者：約 280 名

##### ② 夏休み小学生講座 2023

令和 5 年 8 月 12 日(土)10:00～15:00

「夏休み自由研究・工作なんでも相談室」(講師：金田 卓也教授)、「立体パズル『キューブ 26 ミニ』を作ろう！」(講師：金 美京常勤特任講師)、「アンモナイトのレプリカ作り」(講師：木村 かおる常勤特任准教授)、「昆虫標本作成教室」・「自由研究相談コーナー」

(講師：石井 雅幸教授)、「読書感想文を書こう！」(講師：樺山 敏郎教授)  
千代田区団体の合同体験会 (ボッチャ体験、エスコートダンス、ウォーキングサッカー、  
ミニ講座「間食のすすめ」、朗読、太極拳) (アーバニスト@千代田合同体験会実行委員会)  
参加者：約 103 名

③ 大妻地域連携交流会

令和 5 年 10 月 21 日(土)10:00～16:00

地域連携推進センター活動報告、シールラリー、航空教室 (JAL スカイ)、  
ステージ演奏 (九段小学校「九段 Planets」)

④ 大妻タイムズ

令和 5 年 9 月 12 日(火)No.12 発行

令和 5 年 11 月 22 日(水)No.13 発行

令和 6 年 3 月 28 日(木)No.14 発行

(2) お祭り参加

みたままつり神輿振り

令和 5 年 7 月 16 日(日)17:00～20:00

参加者：75 名

#### 4. 会議

(1) 地域連携推進センター企画実行委員会

第 1 回 令和 5 年 4 月 13 日(木) (文書協議)

第 2 回 令和 5 年 6 月 23 日(金) (文書協議)

第 3 回 令和 5 年 10 月 16 日(月) (文書協議)

(2) 地域連携推進センター運営委員会

第 1 回 令和 5 年 5 月 10 日(水) (文書協議)

第 2 回 令和 5 年 5 月 18 日(木) (文書協議)

第 3 回 令和 5 年 6 月 23 日(金) (文書協議)

第 4 回 令和 5 年 7 月 4 日(火) (文書協議)

第 5 回 令和 5 年 12 月 7 日(木) (文書協議)

第 6 回 令和 6 年 2 月 6 日(火) (文書協議)

#### 5. 地域との連携活動等

(1) 春のアダプト事業 (千代田キャンパス近隣花植活動)

活動日：令和 5 年 6 月 22 日(木)

活動内容：地域住民、本学学生、大妻中学高等学校の生徒、九段小学校の児童、九段幼稚園の園児と一緒に、大学周辺の歩道内及び近隣の公園の植樹枿へ花植えを実施。

(2) 秋のアダプト事業 (千代田キャンパス近隣花植活動)

活動日：令和 5 年 11 月 16 日(木)

活動内容：地域住民、本学学生、大妻中学高等学校の生徒、九段小学校の児童、九段幼稚園の園児と一緒に、大学周辺の歩道内及び近隣の公園の植樹枿へ花植えを実施。

## 6. 千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアム（以下「千代田区キャンパスコンソ」）

### (1) 千代田区キャンパスコンソ運営委員会

令和5年4月21日(金)、5月26日(金)、6月30日(金)、7月28日(金)、9月29日(金)、10月27日(金)、12月1日(金)、令和6年1月26日(金)、2月27日(火)、3月15日(金)の計10回開催

### (2) 人事交流会

令和5年8月4日(金)（於：法政大学）及び9月1日(金)（於：共立女子大学）の計2回実施

### (3) 共同SD講演会

「激動の時代の大学と職員の役割～職員が拓く大学の未来」

講師：吉武 博通（学校法人東京家政学院理事長）

令和5年8月4日(金)10:00～11:30（於：法政大学）

### (4) 千代田区キャンパスコンソ共同大学説明会

令和5年8月5日(土)10:00～16:00（於：大妻女子大学）

### (5) 千代田区キャンパスコンソ共同公開リレー講座「ちよだで学ぶ 2023-知ると未来が楽しくなる-」

「外国語学習は何歳から始めるべきか?-英語習得における年齢要因-」

講師：服部 孝彦教授（英語教育研究所）

令和5年9月15日(金)～10月31日(火)オンデマンド

「その建築は持続可能か、それとも持続不可能か。」

講師：谷口 新教授（短期大学部 家政科）

令和5年9月15日(金)～10月31日(火)オンデマンド

### (6) 千代田区キャンパスコンソ5大学企画委員会 ※各大学の副学長又はそれに準じる者が出席。

令和5年9月21日(木)13:00～14:00 実施（於：法政大学）

屋敷 和子地域連携推進センター所長が出席。

### (7) 千代田区キャンパスコンソシンポジウム

令和5年12月20日(水)17:30～19:45

### (8) 千代田学共同提案事業（計3年間での事業計画における3年目）

本学からは堀 洋元准教授（人間関係学部）、下坂 智恵教授（短期大学部 家政科）が共同研究者となり、「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究(3) 地域連携を視野に入れた帰宅困難者支援施設運営ゲームの開発」を実施した。

### (9) KUG（帰宅困難者支援施設運営ゲーム）体験ワークショップ

令和6年2月21日(水)13:00～16:00

### (10) 令和5年度私立大学等改革総合支援事業

「タイプ3 地域社会の発展への貢献(プラットフォーム型)」に申請。大学・短期大学部ともに選定（実績：平成30年度より毎年選定）。

## 7. その他

### (1) 連携協定

令和5年10月30日(月)付で大妻女子大学と城南信用金庫との産学連携協力に関する協定を締結。

(2) 全学共通科目

協定を締結している企業・団体の協力のもと実施。

「地域文化理解Ⅰ」

令和5年9月4日(月)～9月8日(金) JALスカイ、東京ステーションホテル、文化放送

「地域文化理解Ⅱ」

令和6年1月22日(月)～1月26日(金) ソシエテミックニ、国際食文化交流協会

(3) 千代田区内大学と千代田区の連携協力会議総会

令和6年1月23日(火)10:00～12:00 (於：KKRホテル東京)

屋敷 和子地域連携推進センター所長が出席。

令和5年度 決算報告

単位：円

費目	当初予算額	1回目 組替予算額 (令和5年12月14 日付承認)	①2回目 組替予算額 (令和6年2月8日 付承認)	②決算額	①－②収支差 額
プロジェクト費	4,600,000	4,600,000	4,600,000	2,919,371	1,680,629
地域連携プロジェクト	3,600,000	3,600,000	3,600,000	2,439,599	1,160,401
地域貢献プロジェクト	1,000,000	1,000,000	1,000,000	479,772	520,228
連携・協定関係費	1,015,000	1,015,000	1,115,000	830,596	284,404
事業運営費	3,400,000	3,400,000	3,300,000	1,888,159	1,411,841
大妻さくら祭り	1,000,000	1,670,000	1,670,000	1,356,719	313,281
大妻地域連携交流会	700,000	30,000	30,000	23,702	6,298
センター自主企画等	1,200,000	1,200,000	1,200,000	507,738	692,262
公開講座等	500,000	500,000	400,000	0	400,000
センター事務経費	900,000	900,000	900,000	578,256	321,744
千代田キャンパス	600,000	600,000	600,000	451,626	148,374
多摩キャンパス	300,000	300,000	300,000	126,630	173,370
合計	9,915,000	9,915,000	9,915,000	6,216,382	3,698,618

## 大妻女子大学地域連携推進センター規程

平成 25 年 3 月 27 日

制定

(趣旨)

第 1 条 この規程は、本学における地域連携・社会貢献等（以下「地域連携」という。）推進の中核的組織としての機能を果たすことを目的とし、大妻女子大学学則（昭和 48 年 4 月 1 日制定）第 39 条第 3 項及び大妻女子大学短期大学部学則（昭和 49 年 4 月 1 日制定）第 39 条第 2 項の規定に基づき、大妻女子大学地域連携推進センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(業務)

第 2 条 センターは、次の各号に掲げる業務を行う。

- (1) 産学官連携に関する業務
  - ・ 地域連携にかかる活動や事業の情報発信に関する業務
  - ・ 地域連携のためのプロジェクト事業等に関する業務
  - ・ 社会(市民、企業、行政等)のニーズと大学の持つ機能のマッチング支援に関する業務
- (2) 卒業生及び同窓会との連携に関する業務
- (3) 中学・高校・大学との連携に関する業務
- (4) 公開講座に関する業務
- (5) 地域連携推進センターの分掌に係る会議に関する業務
- (6) 前各号に掲げる業務の他、地域連携に関する業務

2 前項の業務を行うための事務は、センターが行う。

(組織)

第 3 条 センターに次の教職員を置く。

- (1) センター所長
- (2) センター事務部長
- (3) センター事務課長
- (4) センター事務職員 若干名

2 センター業務に関して、その共同推進、学内の横断的連携推進等を図るために、必要に応じて、併任教員を置くことができる。

3 センター併任教員は、学長が委嘱する。任期は 2 年とし、再任を妨げない。

4 センター所長は、学長の推薦する理事又は本学専任教員の中から理事長が任命する。任期は 2 年とする。ただし、再任を妨げない。

5 センター所長は、センターの業務を掌理する。また、所長に事故あるときは、所長があらかじめ指名した者がその職務を代行する。

(運営委員会及び企画実行委員会)

第 4 条 センターに、センターの運営その他の重要事項を審議するため、センター運営委員会を置く。

2 第2条に掲げる業務の企画実行を行うため、センター運営委員会の下にセンター企画実行委員会を置く。

3 センター運営委員会及びセンター企画実行委員会の規程は、別に定める。

(運営細則)

第5条 この規程に定めるもののほか、センターの管理・運営について必要な事項は、運営細則として別に定める。

(規程の改廃)

第6条 この規程の改廃は、センター運営委員会の議を経て、大学運営会議において定める。

附 則

この規程は、平成25年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成25年6月25日から施行し、平成25年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成27年5月26日から施行し、平成27年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成29年6月6日から施行し、平成28年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成30年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成30年9月7日から施行し、平成30年4月1日から適用する。

附 則 (令和5年5月9日 大学運営会議)

この規程は、令和5年5月9日から施行する。

## 大妻女子大学地域連携推進センター運営委員会規程

平成 25 年 3 月 27 日

制定

(趣旨)

第 1 条 この規程は、大妻女子大学地域連携推進センター規程(平成 25 年 3 月 27 日制定)第 4 条第 1 項の規定に基づき設置される、大妻女子大学地域連携推進センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(所掌事項)

第 2 条 運営委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 大妻女子大学地域連携推進センター(以下「センター」という。)の運営の方針等に関する事項
- (2) センター規程及びセンター運営委員会規程等の改廃に関する事項
- (3) センターの運営に関する予算及び決算等に関する事項
- (4) その他センターの運営に関する必要な事項

(組織)

第 3 条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター所長
  - (2) センター事務部長
  - (3) センター事務課長
  - (4) 家政学部長、文学部長、社会情報学部長、人間関係学部長、比較文化学部長及び短期大学部長
  - (5) 人間文化研究科長
  - (6) 事務局長
  - (7) その他学長の委嘱する者 若干名
- 2 前項第 7 号の委員の任期は、1 年とする。ただし、再任を妨げない。
- 3 学長、副学長及び事務局各部長は運営委員会に出席し、意見を述べることができる。

(委員長)

第 4 条 運営委員会に委員長を置き、所長をもってこれに充てる。

- 2 委員長は運営委員会を代表し、その職務を掌理する。
- 3 委員長に事故あるときは、委員長があらかじめ指名した者がその職務を代行する。

(会議)

第 5 条 委員長は、原則として運営委員会を年 2 回招集し、その議長となる。

- 2 運営委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。
- 3 議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- 4 運営委員会は、委員長が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴取することができる。
- 5 運営委員会は、委員長が必要と認めるときは、臨時に開催することができる。
- 6 運営委員会は、委員長が認めるときは、文書協議をもってそれに代えることができる。

(庶務)

第6条 運営委員会の庶務は、センターが行う。

(補足)

第7条 この規程に定めるもののほか、運営委員会の運営に関して必要な事項は、運営委員会において定める。

(規程の改廃)

第8条 この規程の改廃は、運営委員会において定める。

附 則

この規程は、平成25年4月1日から施行する。

(趣旨)

第 1 条 この規程は、大妻女子大学地域連携推進センター規程(平成 25 年 3 月 27 日制定)第 4 条第 2 項の規定に基づき設置される、大妻女子大学地域連携推進センター企画実行委員会(以下「企画実行委員会」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(所掌事項)

第 2 条 企画実行委員会は、大妻女子大学地域連携推進センター(以下「センター」という。)の運営方針に基づき、次の各号に掲げる事項について審議する。

(1) 産学官連携に関する事項

- ・ 地域連携にかかる活動や事業の情報発信に関する事項
- ・ 地域連携のためのプロジェクト事業等の企画・実行に関する事項
- ・ 社会(市民、企業、行政等)のニーズと大学の持つ機能のマッチング支援に関する事項

(2) 卒業生及び同窓会との連携に関する事項

(3) 中学・高校・大学との連携に関する事項

(4) 公開講座に関する事項

(5) 地域連携推進センターの分掌に係る会議に関する事項

(6) 企画実行委員会規程等の改廃に関する事項

(7) その他センターの企画・実行に関し必要な事項

(組織)

第 3 条 企画実行委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

(1) センター所長

(2) センター事務部長

(3) センター事務課長

(4) センター事務職員から 1 名

(5) センター併任教員

(6) 家政学部、文学部、社会情報学部、人間関係学部、比較文化学部、短期大学部及び人間文化研究科から選ばれた専任教員(各学部 1 名、人間文化研究科 1 名)

(7) 学長の委嘱する専任教員 若干名

(8) その他事務局長の委嘱する者 若干名

2 前項第 6 号、第 7 号及び第 8 号の委員の任期は、1 年とする。ただし、再任を妨げない。

3 前項第 6 号及び第 8 号の委員は、併任教員が兼務することができる。

(委員長)

第 4 条 企画実行委員会に委員長を置き、所長をもってこれに充てる。

2 委員長は企画実行委員会を代表し、その職務を掌理する。

3 委員長に事故あるときは、委員長があらかじめ指名した委員がその職務を代行する。

(会議)

第 5 条 委員長は、必要に応じて委員会を招集し、その議長となる。

2 企画実行委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。

- 3 議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- 4 企画実行委員会は、委員長が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴取することができる。
- 5 企画実行委員会で企画した事業等は、必要に応じ、大妻女子大学地域連携推進センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）の承認を得るものとする。  
（庶務）

第6条 企画実行委員会の庶務は、センターが行う。  
（補足）

第7条 この規程に定めるもののほか、企画実行委員会の運営に関して必要な事項は、企画実行委員会において定める。  
（規程の改廃）

第8条 この規程の改廃は、企画実行委員会の議を経て、運営委員会において定める。  
附 則

この規程は、平成25年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成27年5月26日から施行し、平成27年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成29年6月6日から施行し、平成28年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成30年4月1日から施行する。

大妻女子大学 地域連携推進センター  
令和5年度年報 第11号

令和6年6月発行

大妻女子大学 地域連携推進センター  
〒102-8357 東京都千代田区三番町12番地  
TEL (03)5275-6877  
URL <https://www.otsuma.ac.jp/society/>  
E-mail [chiiki@ml.otsuma.ac.jp](mailto:chiiki@ml.otsuma.ac.jp)

